
End Rollとコンティニュー

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End Rollとコンティニュー

【Nコード】

N4559Z

【作者名】

タナカ

【あらすじ】

俺、こと白雪燕斗は気付いたら草原にいました。それから、自分を神だというチャラ男に俺は死んだと聞かされました。なにそれこわい。…そういえば身に覚えが…。その自称神がいうには、俺は生きてるときに大きな間違いか罪を犯したようです。こちらは身に覚えがありません。どうやら俺は違う世界に転生して、その間違いだか罪とかに気付かねばならないようです。意味わかんねえふざけんな。

気付いたら草原にいました(前書き)

転生モノを書きたくて始めました！ 特にチートな能力を初めからもっているわけではありませんが、なにとぞお付き合いをお願いします。

気付いたら草原にいました

俺、白雪燕斗しらゆきえんとは、死んで、何故か美しい大草原に囲まれた花畑に来ていた。

……いやいやいや待て、いや待て。落ち着け、素数を数えろ。違う、これは何かの間違いだ、もしくは夢だ幻覚だ白昼夢だ。あれ、白昼夢ってなんだっけ？ いや、この際そんなことどうでもいい。どうでもいいんだ。重要なのは、どうやってこの夢から覚めることか、だ。はい夢！ はいこれ夢！ むしろ夢じゃなきゃ困る。歩いててバスが突っ込んできて爆発とかそんなのありえない。そんなの普通だったら死んでるし。死んでたら今のこの状態なんなんだよって話だ。俺は死んでない。当たり前。そう、これは夢。だから覚める。まじでお願いします。覚めてください。

「いやいや無理無理ー」

びくつと、いきなり後ろから声をかけられた。え、このパターンなに？ なんて俺声かけられてんの？ はは、まさかこれ神様っていうやつ？ ははは、まっさかー？

おそろおそろ振り返る。そこにいたのは軽そうなホスト風の男。シルバーアクセサリーを首やら手にじゃらじゃら巻いている。全体的にチャラ男にしか見えない。

よかった、お約束みたいな展開じゃなくて。

「燕斗くん、残念だけど俺まじ神様」

「なに言ってるんですかなわけないですよー。こんなの俺の夢に過ぎないんですから。そうそう、夢じゃなきゃいけないんですから」

「現実逃避も甚だしいよー？ はつきりと事故の瞬間覚えてるんだから諦めな？ 人生諦めが肝心って言うじゃんか？」

「その人生終了したらどうすんりゃいいんだああっ！！！！！」

「まあドンマイ」

「うっせええええええっ！！！！！！！！！」

きらり、と白い歯を見せてくる嫌に爽やかなチャラ男（自称神様）。無駄に顔はイケメンと呼ばれる部類だった。夢だったら正直美少女が良かった。

「美少女の神様は今別件で仕事中的なの！ 神様も暇じゃないんだよ？」

「はあ…、あれ？ なんで今考えてることわかったんですか？」

「そりゃあ神様だもの」

「…だからこれはゆ」
「夢じゃないよ？ もう認めたら？ 覚めない夢があると思ってる？」

シビアなことを言われました。笑顔で、俺にとって全力的に絶望的なことを言われました。

「…本当に？」

「本当に」

「まじで？」

「まじで」

「…現実」

「まあ現実だね」

「……俺死んだの？」

「死んだよ。あっけなく」

がくり、と膝から崩れ落ちる。

まじか。まじでか。夢でも幻覚でも白昼夢でもなくて、現実。リアル。三次元。

俺は死んだ。

バスに轢かれて。

とりあえず回想。

「えーと、次は玉ねぎに、にんじん…、あとじゃがいも…」

片手に買い物袋を下げた俺は、近くのスーパーでいつものように買い物しようとしていたけれど、急に今日、少し離れた方のスーパーで大安売りがあると主婦の方に聞いたので、そちらの方にいそいそと向かっていた。

なぜ青春真っ盛りの男子高校生が、そんなことをしているかというのと、理由は簡単。母親がいなかったためだ。

父親は仕事。同じくすでに成人した姉もだ。結果的に残ったのは自分だけ。初めは姉がやっていたはずなのにどうしてこうなったか。姉が怖いので逆らえないが。

「ふふふん、ふーん」

恥ずかしい限りだが、主婦（主夫？）業がはつきり板につき、むしろ体に染み込んでしまっているの、大安売りと聞いてご機嫌で鼻歌までも歌いながらてくてくと歩いていた。

後ろの方からなぜか騒ぐ声とざわめく雑音などを気にもせず、上機嫌だった。今日はカレーにでもするかな？などと考えていたとき、本格的な悲鳴が聞こえた。

振り返れば、すぐ目の前にある大型のバス。運転手は青い顔をして

いて、目は大きく開かれている。耳障りなエンジン音と共にスローモーションのように流れていく景色。逃げようにも、自分のすぐ後ろは壁だった。

俺に向かって突っ込むバス。怒号のように響く悲鳴。熱い痛み。瞬間轟く爆音。

何も考えられなかった。テレビのスイッチを切るように、俺の意識は途切れた。

回想終了。

「……」

「どう?」

「現実か」

「うん」

「……今日の夕食どうしよう?」

「混乱してるね」

親父達ご飯どうするんだろ。姉貴が家事できるから大丈夫だろうけど材料あつたっけ? 確か米はあつたからいいとして、昨日の残りの炒め物は残っていた気がする。そういえば牛乳がなかった。姉貴は朝いつも飲むから買ってないと殴られるんだよな、失敗した。豚肉とほうれん草はあつたと思うから、豚肉のほうれん草和えが出るかもしれない。卵も確かあつたはずだ。なんとかそれで満足は出来……てほしい。

「……そもそも君もう死んでるんだからそんな心配しても意味ないんだと思うけど」

「人の頭除かないでください。結構深刻な問題なんですから」

「そうなの? ……俺としては早く説明に移りたいんだけどな……、

これからのことか」

「これからって…、俺に『これから』はないでしょうよ」

「そういうわけでもないんだよね…」

死んだということは人生の打ち止め。そのはずなのにこれからがある？ 困った顔をしている自称神。どうということだ？ と俺が問うようにじつと神を見ると、苦笑して言葉を続けた。

「君はまたやり直しが効くんだよ」

「…はあ？」

「君が死ぬのは間違いだった…、本来なら、あの時に死ぬべきではなかったんだ」

どうしてだかわかる？ と聞いてきて、迷わず俺は首を振る。だろ
うね、と神は眉を八の字にして笑った。

「君は今まで生きてきた人生において、大きな間違い…もしくは罪を犯した。そして、君はそれに気付いていない。本来ならば、それは生きていくうちに償われていくものだけど…、君は途中で死んでしまった」

「…は？」

俺の口から変な声が漏れた。ぱちぱち、と大きく瞳が瞬く。

待って、待ってくれ。大きな間違い？ 罪？ 何を言う。俺はいたってクリーンだ。真面目に生きてきたし歩道もされたことがなければ学校で問題を起こしたこともない。それこそ何かの間違いだ。

「ちつつち、そういうわけでもないんだよね…。大罪こそが人の性^{さが}。持たない人間などいないんだよ？」

…まあ、つまり要約すると、君はあの時死ぬはずではなかったの

に、なんの因果か命を落としてしまった。死んだ魂は普通なら輪廻の輪を潜り、新たに生まれ変わる…はずなんだけど、そういうわけにもいかない。

君はもう一度、生きなければいけないんだ」

「…意味が理解できないんですけど…。だって俺、もう死んでるじゃない。悪いことした覚えもないのに…、どういうことだよ」

「つまり、君をまた違う世界で転生させ、また人生を繋げるのさ」
「……は？」

間抜けな声二回目。

一瞬耳を疑った。何言ってるんだこの人。転生って…転じて生まれる？ はい？ ホワツツ？

「残念だけど元いた世界の君は死んでしまったからね、違う世界で新たに生きていくしかないんだ。君はまだまだ若いから大丈夫。もしわからないことがあったら教えにいける。なんてったって俺神様だし」

「い、いやいや…話が見えないんですけど。ちょっと待て…、転生って…」

「君は死ぬのが早すぎた」

ふっ、と自称神が真面目な顔をする

「燕斗、さっきも言ったように、君は大きな間違いか罪を犯した。それは本来ならば生きているうちに償わねばならないこと。しかし君は死んでしまった…」

「あ、待てよ…？ もし、俺にそんな間違い？とかがあったとして、こうやって転生する必要があるんだ？ そこまでして、償う？ ……なんで？ 俺、そんな悪いことをした覚えがないんだけど…」

「そうさ、どうにもならないような悪人の魂ならば輪廻することさ

え出来やしない。けれど君のはそんなものとは大きく違っているんだ。そして、それを君は自分自身で見つける必要がある」

そこまで真面目な顔で言ってから、からり、と今度は普通の青年、いや間違えた。チャラ男のようにからりと笑って俺を見た。

しやらしやらとシルバー的なアクセサリが音をたてる。神様なら外せよ。

「まあ、気楽に考えていいさ。正しさとか罪とか、それは人がいるのなら自然に生み出されること。新たな人生をエンジョイしようか！　みたいな感じですか？」

「…かつるいなー…」

「重くても困るっしょ？　まあ転生先なんだけどね…、ねえ君、フアンタジーって聞いて何思い浮かべる？」

「…は？　そりゃあ冒険者とかモンスターとか…」

「うん、つまりそこ行くの」

「……………は？」

「さつてねー…それと…」

「待て。おい待て。すごく待て。はい？　どういうこと？　今結構衝撃的なこと告げられた気がしたんですけど」

「いやさー、世界つてのも結構たくさんあってさー、んで君が行くところがそこ。変えることは無理だからねー」

「は……はい!？」

「言語機能は大丈夫。文字も変換されるようにちゃんと読み書き完備だよ？　まあゆっくりやればいいさ。頑張れ？」

「ま、待て！　え、俺そんなフアンタジーなどこ行くの決定？　まじで？」

「まじでー」

「かつる!？　俺のこれからの先の人生すごくかつるい調子で言われた!？」

「いや、こついうのはノリで突っ走っちゃった方が楽なんだよね？
深く考えたら負け負けー」

「え、えええっ!?!」

こいつ恐らくすっげえ重要なことをノリで突っ走れとかなんとかい
いやがった!?! 本当に神様がこの男。

「無理無理無理、俺普通の男子高校生ですから、そんなとこ行つて
も生き残れない。あ、でも、お前なんか神様なら強い能力くれたり
は…?」

「しないよ？ 神様が大体チートな能力をくれると思つたら大間違
いだからね?」

「どちくしょうが!?!」

そうだよな！ そんなご都合設定あつたら苦労しないか！ 無理で
すよね！

「君の目的は自分の過ちに気付くことだからね…、もし気付いたと
きには新たに選択できるよ？ この世界で生きることを終わらせて、
元の世界の輪廻の輪に戻るか、それともこの世界で生きていくか」

「…なんだよそれ」

「そもそも世界と言うのは別次元のようなものだからね。早い話三
次元と二次元を思い浮かべてみなよ。まさか自分が二次元で生きて
くなんて思わないでしょ？ つまり世界そのものが違うからね、輪
廻の輪もまた別々なのさ」

「…そーですか…」

もう説明をいちいち聞くのも面倒くさい。結局俺は違つ世界で生き
ていくことを逃れられない運命のようだ。

「まあまあそんな気落ちしないで…、というかさ、君もともとスベツク割と高くない？ ほら、家事万能、運動神経抜群、喧嘩も強くて、勉強はそこまで出来るわけじゃあないけど頭の回転は速いし。本当リア充爆発しろとか思われてるよ絶対」

「…そんなもん、モンスターが現れたら簡単にやられるじゃねえか」
「…」
「そういうわけでもないよ？」

「…そういうわけでもない？ 俺は自称神の言葉を聞いて、顔を上げた。自称神はふふん、とむかつく顔で笑っている。

「いい？ そもそも世界自体が違うんだよ？ 星が違うとかそんなんじゃない、そもそも次元が違う。つまりさ、元いた世界の法則は通用しないってこと。理だつてまったく違う。魔法だつて飛び交うし、剣も交じり合う。そうさ、君にとっての異世界なのだからね」
「…世界が、」

「うん。それとね、その世界の人たちはみんながみんな魔力を持っている。だから君にも『魔力核』を転生するときには入れておく。いわば魔力の種。それがどうなるか、どう育つかは俺だつてわからない。神様はいろんなことを知ってるけど、未来は見通せないんだよ。つまり君は強くなる可能性だつてある」

「……」
「…どうしたの？ さっきからおとなしいけど」
「…なんかいろいろ言ってるけどさ、結局のところ…、無事は保障できない、だろ？」
「………、うん」
「どちくしょうがあああああつ！！！！！！！！！！」

自称神が言うには、言語能力と魔力核だけはあちらと同一のものとする、らしかった。言語能力は正直ありがたいけれど、魔力核の方

はようわからない。

自称神いわく、どうにも変化する、ということその魔力核が俺に出来て、どうなるかはわからない。もしかしたら強く変化するかもしれないし、普通の人と同じようになるかもしれない。けれど努力をすれば結果となる。とまあ結局のところ先のことは知ーらねつと投げ出されたわけだ。とりあえずこの神は語尾に をつけるのが趣味なのか。うざくてたまらないのだけど。

「まあ、そろそろお話も終了かな？ さて、君を違う世界へと転生させるよ。…あ、面倒くさいからこのままでもいいよね？」

「…もう、どうでもいいです」

「あ、そうそう転生してくる人もう一人いるから。仲良くねー？」

……はい？ 初耳ですが。

目覚めたらやはり異世界

何かを叫んだような気もするが、それなのに俺の声はだんだんと小さくなっていく。あれ？ なにこれ？ と思うが、それは声が小さくなっていつてるのじゃなく、俺の意識が遠のいているからだと思っ
付いた。

なんだか、死んでいくときと似たような感覚がして、ぶつん、とり
モコンでテレビの電源が切れたように、おれの意識が途切れた。

まず、俺の今までの人生を見直してみよう。

母親が幼いときに死んで、父さんも姉も酷く泣いていた。そのとき
に俺は思ったのだ。『この人たちを守ろう』、と。

…守れてねえじゃん。俺死んじゃったじゃん。そ、それはいいとし
て！ よくないけど！

つまりそのときから俺は努力するようになった。勉強の方面はあま
り向かないし、姉の分野（弁護士を目指してた）だったので、体力
をつけて家のことをして、将来は働きに出ようと思っていた。

父さん」は母親が死んでから、俺達のために必死に仕事に取り組ん
でいて、たまに倒れることもあった。けれどそのたびに体が強化さ
れていつてるらしく、この前チンピラに絡まれてる女性を助けたら
しい。どこのヒーローだ。しかもその際に女性に惚れられたらしく、
何度か迫られてるのを見た。しかも同じようなものを違う女性で。

どこのフラグメーカーだ。まあ、父さんは母親一筋だったらしいけ
ど…、って話逸れた。

つまりそんな父さんの様子を見ていた俺は、ひたすら頑張った。父さんみたく、家族を守れるように。三人しかいないのだから。だからこそ家事も進んでやった。…最近はむしろ楽しくて料理権は全部頂いてるけど…。ついでに父さんを見習って、少なくとも変な輩からは大事な人を守れるように力もつけた。そしたらどこからか俺が不良だつて噂が流れたけど…。そのことについては姉に腹を抱えて爆笑された。ちくしょう。

部活は小学校から陸上部に入っていた。ここだったら運動も出来るし、走ることでいいしそこまでお金もかからないと思っただからだ。…実際は遠征費やら何やらしたが…。そしたらいつのまにか走力が群を抜いていた。やることなく走ってただけなのになぜだ！？ちなみに大会で優勝したこともある。

…つまり自称神が言っていた高スペックというのは、全て家族のために頑張ったものなのだ。

こんな俺が別世界に転生とかありえますか？今頃父さんと姉はどうしてるだろうかと考えると胸が痛くなる。結局のところ、俺は家族を置いて行ってしまったし、もう守れない。そう思うたびに泣きそうになった。思春期ぐらいの年だが俺はやはり家族が大好きなのだ。父さん、姉ちゃん、死んじゃってごめん。

自称神が言っていた自分の間違いか罪をさつさと見つけて、こんな世界とオサラバするか、と俺はそう考える。だってそうだろ？こないだいつ死ぬかわからない世界より、あの世界の方が良い。もう、父さん達の元へと生まれることは出来ないと思うけれど、あの世界は暖かいものがたくさんあったのだ。

死んだ母親のぬくもり。父さん達の笑顔。友人達との騒ぎ声。

今考えると、それはとても大事なものだ。早く、早く帰り

……俺は悪くない。俺は悪くありません。普通の感覚ならこうなってもおかしくないはず。

「まじか、まじで異世界か？ 夢でもなくて？ やっぱり現実…？」

試しに頬を抓ってみた。痛かった。現実であり夢じゃない。

自称神に言われてたことだったが、さすがに目の前に現れると戸惑うし、驚く。それに恐怖もある。

見知らぬ世界に、頼れる人もいない中で一人ぼっち。

…まじでか。

うわあああ…と頭を抱えて、大きく息を吐く。そのときに、ふともぞり、と動くものがあることに気付いた。

どうにも上ばかり見ていた俺だったが、それは、俺のすぐ近くの真後ろにある、なんか生暖かいの。

…え、モンスター？

一気に血の気が引く。確かモンスターもいる、と言っていた。でも、いきなり？ 俺倒せると思えないんだけど？

ぎぎぎ…と油の差してないロボットののように振り替えると、そこには白い着物のようなもの見えた。

「は…？ 人…？」

気を落ち着かせてもう一度見れば、それは神社の神主が着てるような服を、動きやすくしたような感じで…、狩衣、と言えはいいのか？ つまりそんな感じの服装をしている、人間、だった。

その瞬間、自称神の言っていた言葉を思い出した。

転生してくる人は、もう一人、いる……。

もしかして、と思い、その人間の顔をまじまじと見ていた。多分同年代。明るい茶色の髪で、所々飛び跳ねている、というか横跳ねの髪型だ。頭部の後ろを見ると、案外長い髪をしているらしく、下のほうで縛られていた。

…日本人、なのか？ この衣装は和風っぽいんだけど…。

そう考えていると、その狩衣を纏った人間の瞳が、開いた。

「こんにちは」

「……？」 状況を掴めていない。

「あ、おはようございますなのか？ こういう場合は」

「……」 考え中。

「お前もあの自称神に会った？ あのキャラそうなの」

「……??」 混乱中。

「ところでここ異世界なのかな…、見たところお前も転生してきた人間だよな？」

「……！」 思い当たる節を見つけた。

「まさか本当にモンスターとかいたらどうすつか…お前戦える？」

「……っ！！！」 思い出した。

「…どした？」

「ここ本当に異世界！！！！？」

「あ、やっぱりお前俺と同じか」 平然。

俺は人がいるとなんとなく気も落ち着いてきた。こういうとき「ユ力大事。…あれ？ 違う？ まあなんでもいいが、似たような人がいるというのは、案外支えになるものだ。

「え、嘘…本当に来たんだ…。これは、喜ぶべき…？ いや、悲しむべきということ…？」

「おいお前なんていうの？ 名前」

「え、へ、な、名前？ て、ていつか何でそんな落ち着いてられるの……」

「いやさつき散々驚いたけど……」

そりゃあ驚いた。凄まじく驚いた。限りなく驚いた。実際叫んだし。だからそんな変なものを見るような眼で見ないで頂きたい。

見た目ではあまり見分けがつかなかったがどうやらこいつは男らしい。瞳は俺と同じく黒色だった。なんだ、普通に日本人っぽい顔立ちだ。

「俺は白雪燕斗。お前は日本人？」

「にほんじん？ ……俺はそんな名前じゃないよ、忌月きげつ、それが俺の名」

「…日本人じゃない…？ 苗字は？」

「苗字？ そんなの位の高い人間がつけるもんだろ？」

「え、お前どこから来たの？」

「香耶かやの国、列峰領れっほうの治める……」

「もついい理解した」

こちらも違うファンタジーなのか。

目覚めたらやはり異世界（後書き）

同じく転生してきた人は男でした。

魔女と出会いました

「…それで、これからどうしようか」

忌月と名乗った男に問いかける。自己紹介を済ませてるうちにどうやら同い年だったということがわかった。身長は俺のが高い。そのことに優越感を覚えつつ、これから先のことを話し合おうと口を開いた。

「あのチャラ男、本当に放り出してきやがって…」

「ちゃ、ちゃらお?」

「あー…あの自称神。軽そうな男」

「…神様? 神様は女だったよ? しかも綺麗な人だった」

「…なんですと!?!」

「ま、まじで!?!」

「え、食いついてくんの!? あ…ああ、なんか『別にあんたのためなんかじゃないんだからね!』って言われた」

「つ、つつつつつつつつツンデレ…だと…!!! 俺のところはあの自称神とかいうチャラ男だったのに!? 理不尽だ!

「あれ? でもそういえば、美少女の神は別件で仕事とかなんとか…。まさか…」

「お前か! お前の方が! お前の方に行つてたからこつちに来なかつたのか! 謝れ! 全身全霊をかけて謝れ!」

「え、ごめん…、じゃなくてなんでいきなり怒ってんの!?!」

「ちくしょう…! 俺だって美少女の方が良かったさ…! あんな

チャラ男に笑顔で君死んだよとか言われて腹立たないとかおかしい
だろ！？ だろ！？」

「へ…へえ…よくわからないけど、その、ちや、ちやらお？ が気
に入らなかつたわけだ…、って俺に八つ当たりすんな！」

「しなくちゃこの荒ぶる気持ちを抑えきれねえ！！」

「知るか！」

ちくしょう！ 俺も会いたかつたよ美少女！ 調理実習のときに女
子より手際よくてしかもいいとこ見せようと飾り切りまでくりだし
て、最終的に全部自分で作つたら白い眼で見られた俺だよ！

男子に女子より女子力高いんじゃないやね？ と褒められて、女子には先
ほど言つたとおりの目で見られて…、俺のハートは粉々でした。こ
れでも俺だつてモテてみたいと一般的な男子の欲求はあるんだ！

「だいたい、俺はなあ、もっと女子と…」

「しっ！」

さらにいろいろ文句を言おうとしたら、いきなり口を塞がれた。は
あ！？ と思わずその手をとろうとしたが、どうにも忌月の様子が
おかしかつた。

よくよく考えてみると、俺は今叫んでいた。イコールそれは大声だ
つた。イコールそれは周りに響くというわけで。しかも、この世界
は、ファンタジー。言ってみればそりゃあモンスターがいるらしく。

「……………」

今更自分の失態に気付く。こんなわけわからない場所で大声出すな
んてありえない。馬鹿か俺。背中に冷や汗が流れ、体温が下がって
いく。

ちくしょう、気付くべきだつた。ここは異世界。ここのルールが何

なんてわからないし、わかるはずもない。だって俺はここに転生してきたばかりだからだ。…言い訳になるな、これ。

がさがさとこちらへ近づいてくる音がする。それは確実にこちらの方へ向かっていた。自然に体が緊張や恐怖により強張った。忌月の方も同様だった、けれど瞳の中に鋭いものを蓄えてる。

…あれ？

そのとき俺はどうしようもなく、違和感を感じていた。それは特に説明がつかないが、どうにも、違和感というか、不自然だというか…とにかく曖昧なものだ。

けれどガサガサツという茂みの音に、その思考は途切れる。来るか…？ と身構えたそのとき、

「おや？ そなたら人間か？」

やけに高いモンスターの声だ。…ん、あれ？ 違う？

ぱつと声のした方を見ると、そこには緑色のローブを地面で引きずりながらこちらへ寄って来るピンク色の髪に紫色の瞳。うん、ファンタジー。ってそうじゃなくて、え？ どういうことなの？

その人はどうにも幼い顔立ち&身長で、小さい子供のようだ。けれど喋り方がおかしい。子供らしくない。その子供らしくない幼女？

は俺達二人を左右見て、それから顔を赤らめる。

…赤らめる？

「いや…わしはそういうことに偏見など持たん、邪魔して悪かったのお…」

…ん？

ちよつと待て、俺達の今の体制を確認してみよう。

俺 先ほどまで文句を叫んでいたため若干忌月の方へ乗り出し、顔も随分近い。

忌月 茂みの音に気付いたため、俺の口を塞いでる。

…総合して、考えると……、

「ちつがああああ うー！俺はそんなアブノーマルな趣味持ってません！ 違います！ 本当に違います！」

「は、え？ あ、あぶのーまる？ なんだそれ？」

「…なに？ おぬしらはこの森の中で事に及ぼうとしてたわけでは…？」

「そんなことあるか ……！俺は女の子！ 女の子が好きなんです！」

「そう叫ばれても困るのじゃが……」

「ごめん俺理解できてない。誰か説明して」

さっぱりわかってない忌月は置いていて、俺は幼女に慌てて近寄る。

「俺達、ここよくわかんなくてさ…道もわかんないし、ここらへんに家ってないか？」

「わからない…？ ……ううむ…、おぬしら、わしのことわかっておるか？」

「ん？ なにが？」

「わしはこの深海の森の大魔女、ウェイブ・マーガレットじゃぞ？」

「…魔女？」

魔女、魔女、魔女…、まさか、あの？

「あ……」

「あ？」

「握手を！」

「……………」

あれ？ 俺なに言ってるんだ？

…なに言っちゃってるんだ！？

……………なに言っちゃってくれちゃってるんだ俺！？

「うわ、わわわわわ、すいません、俺魔女っ娘とか考えてないです

！ 違います！ 萌えとかそんなのと違いますから！」

「…違うのか？」

…ん？ なんで残念そうなんですか？

「盛り上がっているとこ悪いんだけど、お嬢さん、出来ればここどこか教えてほしいんだけど…」

「お嬢さんではない…。ん？ ……なにやらおぬし、ぽっかり抜けたような力があるな」

「え、わかります？」

「…なんの話だ？」

話に入ってきた忌月を見たウェイブは、なにやら変なことを言う。

それをさらりと受け止め、むしろ理解してるような口調だ。

訝しげに見ていたのに気付いたのか、忌月が慌てて俺に教えるように言った。

「俺、死ぬ前は霊媒師だったんだよ」

……………なんですか？

魔女と出会いました(後書き)

衝撃の事実なのかなんなのか…。ちなみに魔女様は美少女です。

同じ転生者は霊媒師

「れ、霊媒師？ 霊媒師って…、あの、霊とかなんやら被うやつ…？」

「そうだけど…君の世界にはないの？ 俺のいたところじゃ、一般的職業だったんだけど…」

「そ、そんなサラリーマンみたいな扱い!？」

「さ、さらりいまん？」

そうか、よくよく考えてみれば忌月は日本人というわけでもない。いくら顔立ちが俺の元いた世界に違和感ないものだと思っても、こいつもまた違う世界にいた。俺の常識の中で通じるものも、他ではまったく適応されないのだ。

それに忌月だって俺の主にカタカナで使われている言葉に反応していた。年も同じだから、ついまったくわからない、という顔をしながら言葉を反復されるたびに俺はようやく気づくのだ。ここは日本じゃないと。

それにどうやら言語機能も若干の差異があるらしい。現にウェイブには通じているように見えた。『アブノーマル』とか…、いかん、考えるな考えるなおぞましい。おっと話がずれた。

「まあ、そういう『霊力』ってのが俺にはあつただけど、この世界に来るときにはすっぱり抜けたってわけ。まあこの世界にある魔力？とはまた違う力だからしょうがないとは思っただけどね」

「そういうのがあるのか…」

「まあ別に俺はどっちでもいいんだけどね？」

そういう忌月の顔は後悔も何も無いように見える。いや、むしろ嬉しそうなような…。まあ確かにこの世界にとって異質なものはない

ほうがいいだろう。目立ってもしょうがない」

「違う世界…？ やはりおぬしらこの世界のものではないのか？」

「え」

「え」

「…なんじゃその反応は」

「いやいやいや世間話のように言われましたよウェイブさん。俺と忌月は顔を見合わせる。」

「…わかるもんなの？ そういうの」

「普通の人間にはわからんじやろ。時間がたてばおぬしらもこの世界に染まるじやろうが、いかにも臭いが違う」

「に、臭い？」

「昔にもそういうものがおったからのお…、150年くらい前じゃろうか…」

「ひゃ、ひゃくごじゅうねんっ！？ お前いくつだよ！」

「ん？ 今年で324歳になるの」

「…っ！？」

なんてこつたい。300歳越え…だと…？ 確かになんかの物語で魔女は長生きだと聞いたことがあるけど…、こんな幼女が？ まじか？ まじですか？

ちなみに忌月は、「だからそんなに口調なのか…」とかなんやら言っている。突っ込みどころがずれてるぞ。

「まあかなり珍しいことには違いなからな。特にその黒い目はあまり見かけん」

「やっぱり青とか緑とかオンパレード？」

「お、おんぱりいど…？」

「そうじゃな。まあかといって珍しい、というだけじゃ。気にせずともよいと思うぞ？ …立ち話もなんじゃ、おぬしら、わしの家にも来ぬか？ この世界のことを教えてやる」

「本当！ 助かるよ、う、うえいぶさん」

「…本当お前カタカナっぽい言葉苦手だよな」

「かたかな…？ な、慣れるから！ そのうち慣れるから！」

忌月と軽口を言い合いながら歩き始めたウェイブについていく。その間にも少しだけ説明を受けた。

まずはこの世界は魔法が普通に存在する、ということだ。この世界に存在する人間は魔力核、というものを持っていて、それを育てることで魔法の力を上げているらしい。まあ、魔力核と言うのはあの自称神に受けた説明どおりだ。

魔力核は人によって千差万別十人十色。つまりそれぞれ違うらしい。似たようなものはあっても同じものはない。人によって成長速度が違ったり、容量が違ったり、属性が違ったり…、ちなみに属性と言うのは、炎、水、風、土、雷、風、闇、光、そのどれにも属さない（筋力強化などの魔法）無ということらしい。合った属性以外が仕えないわけではなく、国語より数学、音楽より家庭科、のように自分に合った、ということだ。つまり全属性をこなせる人もいるということもないこともない。

魔法を使うときに必要なものは魔力とイメージだ、とウェイブは言う。初心者には魔術書などというものがあり、そこには詠唱の言葉と共に魔法が載っているらしいが、詠唱は実際どんなものでもいい、一番大切なことは魔力を形にすることだ。そのときに詠唱と言うものは必要で、形のない魔力を整える、まあ例をあげるとするならば粘土をこねて像などを作るようなものらしい。簡単なものならば詠唱は必要ないらしいが、魔法を得意、もしくは魔力が少ない者、魔力をたくさん使う魔法には用いられる。

「…出来そうか？」

俺はとりあえず忌月に尋ねてみる。

「んー、俺は死ぬ前は似たようなもんで飯食ってたわけだし…、君のところじゃそういうのなかったんだろ？ 君こそ大丈夫なの？」

「料理洗濯掃除なら大得意なんだけど…」

「…それは女の人がやるものじゃないの？」

「あーそれは女性差別なんだぞ？ 学校で習わなかったのか！？」

「な、なんでいきなり怒るんだよ！」

「うるさいのう…、静かにしたらんとモンスターが襲ってくるやもしれんぞ？」

「もんすたあ？ なにそれ？」

「怪物とか妖怪みたいなもんだよ」

やはりカタカナ的な言葉は苦手なようだ。口調は普通なのだけれど、どうも年が食い違ってるように見える。

なんとなくそう思っているとウェイブが指差しながらこちらを向いた。

「あそこがわしの家じゃ。それじゃあこの世界のことを説明しようかの」

魔女の家は案外普通

魔女の家、と行って、少々身構えていたのだが、そこはどうにもイメージと違って小綺麗なものだった。もちろん魔女に付き物？な壺や杖はあったのだが、壺は中身は入っておらず空だし、杖だって艶やかな羽とか、毒々しい紫の水晶玉まくつついてるわけでもなく普通の木の杖だ。その代わり本が本棚に限りなく詰め込まれていて、それは地面にも積み重ねられる程だった。けれどきちんと計算されているのか、それは邪魔ならない程度にあるのであって、やはりイメージとは異なる。

なんというか…書斎のような。ウェイブが普段使っているらしい机にも同じように本が積み重ねられていて、他にも資料らしき紙が無造作にばら撒かれている。あちらの方が余程汚い。

こっちじゃ、とウェイブが招くところは客室のようで、これまた普通という形容詞が正しいものだった。いや、日本と比べてはどことなく昔の外国？ ヨーロッパ辺りの古い家に似た感じだ。

「座って待っておれ、紅茶でいいな？」

「ああ」

「こっちじゃ…？ お茶、だよな？」

「なに言ってるんだ、座ろうぜ？」

「え、そうやって座るの？ 畳とかはないの？」

…こちらの方もいろいろあるようだ。俺基準にしてみれば、この世界も大体のこと（例えば家とか服とか）は俺のいた世界と似たようなものではあるが、忌月にしてみればまた違うらしい。

畳と言ったけれど、やはり忌月は昔の日本に似た世界から来たんだろうか…、服装だってやはり狩衣にそっくりだ。かといって教科書でしか見たことがないんだけども。

ここで紅茶が存在しているように忌月がいた世界に畳だつて存在していてもおかしくない。俺の耳が翻訳されているだけで、実際の名称は違うはずだ。これはあの自称神に感謝しなくちゃなるまい。

「そつえば聞いてなかったけど、お前どうして死んだの？」

「…え？」

「いやだから、お前も死んで異世界に来たんだろ？　なんで死んだのかなつて」

「……」

「…忌月？」

「たいしたことじゃないよ！　え、えんど…？　だっけ？　そつちはどうしたの？」

「エンドつてなんだよ俺終了しちゃつてるじゃねえか」

あからさまに俺に話題を移した忌月。よくよく考えれば自分の死んだ経歴なんてあんまり聞かせたくないわな。デリカシーが足りなかつたかもしれない。

「俺はトラックが突っ込んできてそのうえ爆発して死んだ」

「寅が爆発…？　痛そうだねそりゃ…」

「食い違つてる気がするけど気にしないでおこつ」

カタカナはそのまま伝わっているわけか…、なんか言語能力があつちよりこつちのが高性能…？

『それは俺が有能だからだよー』

…今不愉快な声が聞こえた気がした。気のせいだ。確実に気のせいだ。考えたら負けだ。これだいい。

『向こうの神様がねー、基準を俺と合わせちゃったんだよ。いくら苦手だからってさ。手伝ってって言ったら手伝ってあげるのに。素直じゃないよね?』

『な、なに勝手なこと言ってるのよ! ベ、別に真似したわけじゃないんだから! あ、あなたの方が、仮に性能が良かったとしても、その、違って…で、出来なかったわけじゃなかったんだからあ!』

『うんわかってるよあ、だからほら、泣かないで』
『な、泣いてないわよ! か、勘違いしないでよね!』

「リア充黙れ!」

「え、えんどどうしたの? いきなり叫んで…」

「いや、今お前の言語能力がかなり残念な状況にあるのはあっちの責任だったみたいだ。だからお前も叫べばいい、『リア充爆発しろ』と…」

「いや意味わからないんだけど」

「あともう一度言っておくが俺はエンドじゃねえ。終了してねえから」

「紅茶を入れてきたぞー、キゲツ、エンド」

「ああああお前が言ってるから結局エンドになっちゃってるじゃねえか!」

人生終了して名前も終了ってか! 不吉じゃねえかこの野郎!

「いちいち騒がしいのう…、まあ飲みながらも聞けい、ほら」

「…サンキユ」

「…この取っ手持ち上げるのか…」

「お前だけ毎回ずれてるな」

ウェイブが自分の紅茶を一口飲んでから、ふう、と小さく息を吐き、俺達に向き直る。

「まずはこの世界はアストウリアスと言う名じゃ。それでここは深海の森。この近くにはイベリアという大きな街がある。そこでおぬしらはギルドに登録するがよい」

「ぎるど…?」

「あー、俺わかるから、説明するから会話だけ覚えて後で俺に聞け」
「わかるのか…? まあそれはいいとして、そこで登録して『冒険者』となるのがおぬしらには一番良いと思うのじゃ。これは国と国とを行き来することにも使えるし、まあ身分証明書じゃな。これが大きく役に立つ。まあギルドとしては仕事を受けるといのが一般的じゃ。簡単なものからそりゃあ難しいものまで山ほどある。そのどっちともに料金はもらえるからの。生活には持って来いじゃ」
「仕事って、どんなのがあるんだ?」

「なに、モンスター退治やら、秘宝を求めてダンジョン攻略するためのパーティ集めやら、引越しの手伝いやら、そうじゃ、料理人募集のようなものもあるのう」

「料理! まじか!」

「そ、そんなキラキラした目で食いつくところかの…?」

料理なら持つて来いだ! 試行錯誤を繰り返して作り上げた究極の味噌汁からフグの調理(こつそり猟師さんにもらった本体丸々)を完璧に行い、さらには和食洋食中華なんでもこなした。

全てのバイト先でも何度も就職に来てくれと言われたし、それどころかプロの人にさえ感激させた。俺ははっきり言える。料理の腕だけはチート級だ。…まあ努力も異常にしたけれど。

「…おぬし見てみたら器用さが異常な数値じゃ。魔力量もそれなりが望めるし…、おぬし案外いい線いくかもしれんものう」

「え、そういうのわかるのか?」

「わしは魔女じゃぞ? そのくらい造作もないわ」

「へえ、俺は？」

「ぬしのはなんと言うか…もともと合った『なにか』のせいかな魔力の質が特異じゃな。それにぼっかり空いた穴が大きい分、量だけはかなりのを望めるぞ？」

「…なのに貧弱じゃ。限りなく体力がないうえ力もない。走っただけで息が切れるレベルとは…、男としてそれはどうかのう」

「……」

「おい、今こいつに多分クリティカルに精神的ダメージを負わせたぞ？ 人の気にしてるところ突いちゃった感じじゃなく抉っちゃった感じだぞこれ」

「まあ話続けるぞ」

「あ、スルーしたこいつ」

どんよりした精彩を欠いた目で、暗雲を周りに漂わせてる忌月さん。そこまで気にしていたことなのか。

「それでこの世界の大体の事情なのだが、数年前から戦争が始まっておる」

「え、そんなへビーな状態？」

「まあ今は休戦しておるが、どうなるかはわからん。…それに戦争が始まるより、また数年前から魔物の数が増加してきておる。総合すると、まあぶっちゃけ あんま平和じゃない的な？ …ということじゃ」

「…ノリが軽いぞ？」

「軽くせねばやっておられん。まったく人間というものはどうしようもないものじゃ。今も魔物は増えてきておるといふのに、同じ種族同士で争いおつてのう…、いや、今は亜人やら獣人やらごっちゃか」

「…ちなみに数年前つてのは、どのくらいだ？」

「ん…戦争が始まったのは百年ほど前、魔物は増え始めたのは百五

十年ほど前じゃの」

「数年じゃねえ…、」

「戦争なんて下らんことしとる暇があつたら魔物の討伐隊でも組めばいいと思うのじゃ、なのになぜそれをせぬのかのう…」

「そりゃあ当人達にとつちやくだらないもんじゃないからなんだろうよ。それぞれが違う正義や信念持つて生きてんだ。それをみんなが掲げるから争いになるんだよ。結局誰も間違つてないからさ」

そんなことをなにもなしに言つたら隣に座っているいつの間にか
生气を取り戻した忌月が目をぱちぱち、と瞬かせて俺を見た。

「…君と同じことを言つた人がいたんだ」

「へえ、それは素晴らしくイケメンなんだろうな」

「いけめん？ ……麺？」

やばい、だんだんこいつの言動面白くなってきた。

魔女の家は案外普通（後書き）

地名やらなんやらはクラシック曲から使わせてもらったりしていません。

アストウリアス

アストウリアス（伝説曲）（西語：Asturias）（Leyenda）は、イサーク・アルベニスのピアノ曲の一つ。元来は、《旅の想い出》作品71の第1曲、前奏曲「伝説」（西語：Leyenda）として書かれた曲である。

イベリア

イベリア、12の新しい印象（フランス語：>Iberia< 12 nouvelles ? Impressions ? en quatre cahiers）は、イサーク・アルベニス最晩年のピアノ曲。

Wikipediaより。

修行しました

それから、ウェイブからたくさんこの世界の常識を知った。

まずは暦。春の月、夏の月、秋の月、冬の月の四つがあり、一月は90日ある。春の月1日、と数えるらしい。地球では12ヶ月で一年だったから、それを聞いて思わず眉を顰めたが、一月が90日だということとは30日分が三つ…、ということと考えればまあいいとおもう。合計で360日だし、そう思えば割と近い。

それからモンスター。予想通りゴブリンとかオークとか有名どころがうじゃうじゃといる。俺の聞いたことのないモンスターの名前もあつたがそれもやはり異世界。異世界だといつても世界は世界なのだ。知らないことがあつたって仕方がない。

「おぬしらがよければいいんじゃないが、しばらくここで修行せんかの?」

「へ、どうしたいきなり」

「いや、まだこの世界に来たてであまり力の使い勝手がわからぬじやろう? 都合のいいことにおぬしらにはおぬしらなりの知識が豊富にあるようじゃし、案外強い魔術師になれるやもしれん」

「え、俺ら、魔法なんて使ったことないんだぞ? なのに大丈夫なのか?」

「それに強い人って小さい頃から鍛えてるもんじゃ…」

「いいや、そんなのは考え方一つ、戦い方一つでどうとでもなるわ。魔力が少ない人なら少ない人鳴りの戦い方があるように、誰しも得意不得意があるように、確かに経験がないのは厳しいが、おぬしらにはおぬしらのことは一風変わった考え方、想像力があるじゃろ

う？ それにわしが鍛えてやると言っておるんじゃ。いたずらに大魔女と呼ばれておるわけじゃない」

「…まあ俺にとっちゃ願ってもない誘いだけど…、いいのか？」

「構わん。近頃は退屈しておったしの。それにおぬしらは…面白そうじゃ」

「？ どういう意味だよ」

「そういう意味じゃ。よし、まずはだいたいのモンスターの知識を詰め込まんとう…」

「え、俺勉強嫌い」

「俺も？」

「おぬしは体力づくりじゃ。せめて一般人には追いつけ。おぬしは記憶力がよさそうじゃから本さえ渡しとければいいじゃる。魔物払いの境界をしておくからまずは十周ほど走ってこい」

「……俺に死ねと？」

「どんだけ体力無いんだよお前」

つまりそんなこんなで、大魔女さん、ウェイブとの修行が始まった。先ほど台詞の中に登場したが、俺は勉強が嫌いだ。自称神には頭の回転が速いなどと褒められたが、勉強は本当に苦手だった。

成績は下から数えた方が断然速い。情けないことだけれど、つまり、そういうことだ。…馬鹿なんです。すいません。

一方の忌月は、確かにウェイブの言った通り本を貰い、ただ読んでいるだけで簡単に覚えていた。だけど体力がおかしい。なんで十メートル走っただけで息切れするほど疲れるんだ。そのうえ顔も青くなるし今にも倒れそうだし、正直ここまでとは思わなかった。

十日間はお互い苦手分野のことに徹し、ひたすら努力をした。さすがに俺だってサボってられないことはわかっている。下手したら死ぬのだ。そういう危険が常に纏わりついている。

ギルドに登録せずに働くことはダメなのか、と聞いたことがある。

身分証明書はすっぱり諦めて。そうしたら、『どこから来たものかさっぱりわからぬ奴をそうそう雇えると思うか?』などと返された。確かに俺達にはもう家族いない。いや、生きているのだけれどこの世界には存在していないのだ。それに今頼れるのはウェイブただ一人。だけれどこの魔女が住んでいるのは森の奥深く。しかもなにやら『恐れられた存在』らしい。なんだか魔女らしい噂だ。

つまり後ろ盾と言うものが存在しない。いきなりぱつと現れたこんな怪しい奴を雇ってくれるのは相当人の良い人間らしい。じゃあそういう人を探せば、と言うと、『そんな人におぬしは頼れるか?』と。…無理かも。まあギルドには登録するつもりだったし、一応聞いてみただけなのだけれども。

十日たつころには、忌月が一般人並みの体力になっていた。それに俺はすごく驚いたが、ウェイブがあっさり答える。

「自力じゃもうほぼ無理だったから、魔法でぎりぎりまでそういう筋肉などをあげて、それからトレーニングさせたのじゃがそれであれがもう今出来る全てじゃった」

…通りで落ち込んでるんですね忌月さん。隅で体育座りをしており、背中には暗雲を背負っている。なんとか忌月を立ち直らせてウェイブから今度は『魔法』について学ぶ。

魔法というのは、前にウェイブが言ったとおりそのまま、イメージして錬った魔力を詠唱で形作る、という感じだ。本に記されているようなものがたくさんあり、オリジナルで創作できたり、魔法と言うものは無限の可能性を持っている、という話だった。

まあだが、オリジナルで魔法を作るとするのは難しく、確固たるイメージを持ったうえに魔力も大量に消費するらしい。まあ初めて使うものだからそういうものだよな。

「…魔法というものは感情に連動したりする。これは気をつけなければいけないことじゃ」

ウェイブが真剣な顔立ちで言う。

「例えば怒りで我を忘れるときがあるじゃろ？ あれは酷く危険な状態なんじゃ。そんな感情から魔力のバランスが崩れ、増幅する。それが放たれれば、相手どころか自分も傷つく。十分用心するんじゃないぞ？ …まあ人の心はそう無理矢理制御できるもんじゃない。じやが、ちゃんとそれは覚えておれ」

それからまた数十日がたった。

ウェイブの元で身を守れるだけの力と魔力を蓄えた。魔力はどうやら自然に体力が回復すると共に溜まっていくらしい。うまいものを食べても補給される。そんな簡単なものなのか…と半ば呆れたりもしたが。

魔法も使えるようになった。俺はどうやら異常に器用らしく、案外簡単に出来たので俺自身が驚いた。ちなみに忌月は、元いた世界で使っていた力とどこか似ているらしく、こちらも簡単に出来た。…そんなんでいいのか？

忌月は霊力？の際に使っていた術を試そうと一人でいろいろやっていた。それを見て俺自身もオリジナルのやつ作ってみよーかな、などと考え、別々に修行していた。

なんとなく、俺は焦ってたのかもしれない。元の世界でまた生まれるため、俺の、『間違い』か『罪』を探す。力つけた先に、何かがあるんじゃないかと。

そして、俺達は今日、魔女、ウェイブの家から出る。

別れと出会い

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫だよ、心配すんな」

「…いつでも来てもいいからな？」

「ありがとう、困ったらまたここに帰ってくるよ」

俺は帰る、という言葉に変えてウェイブに告げる。すると、寂しそうなウェイブの顔が少しだけ緩んだ。

今日までの間世話に会って、最初に出会ったこの世界の人間がウェイブでよかったと心から思っている。多分忌月も同じ気持ちだろう。こちら眉を八の字に下げて、少し寂しそうだった。

「ウェイブさん、本当にありがとうございました」

それでこの忌月、少しの単語なら発音できるようになっていた。どうやら言葉関連は記憶力がいいはずなのに苦手らしく、覚えるのにこずった。ウェイブの名前はちゃんとと言えるようになってたが、いつの間にか忌月は俺のことを『エンド』と呼ぶようになっていた。…いや俺まだ終わってねえし。一回終わったけど転生したし。いくら言っても直らないのもう諦めたのだけど。

「それじゃあ行くな。本当にありがとう、ウェイブ。今度お土産もつて帰ってくるからな」

「絶対じゃぞ？ 絶対じゃからな！」

「はい」

「じゃあ、行ってきまーす！」

俺と忌月は歩き出す。時折振り返りながら進むけれど、ウェイブは
ずっと、手を振っていた。…本当に、彼女と会えて、すごく幸運だ
ったんだなあ…としみじみ思う。

森をずっと進み続ければ、やがて木々の量も少なくなってくる。そ
の間に体力のない忌月は何度もバテたりしていたが、とりあえず応
援だけして歩かせた。

ウェイブが言っていたのだが、忌月の体力は一般的な女性ほど…ら
しい。それを聞いてさらに泣きそうな顔になり、「一般的は一般的
でも、体力の無い部類の一般的じゃ」、とさらに追い討ちをかけら
れ、本気で落ち込んでいた。なんていうか傷口に塩どころかタバス
コかけた感じだあれは。可哀想過ぎて俺も若干涙目になった。元は
どれだけ体力がなかったんだよ。

「ギルドに入ったらどうする？俺らでパーティ組むか？」

「え、ぱーてい？…ぱーていぱーてい…パーティか。組んでくれ
る？世界違って一人じゃ心細いし、あんま異世界人だってこと喋っ
たらダメって言われたし…」

「ま、気楽に行こうか。まずは慣れといた方が身のためだし」

「うん、わかった。これから頑張ろうか」

「ああ」

「死なないようにね！」

「…笑顔でそんなこと言うな、悲しくなる」

そうだよな、死んでこの世界に来たんだよな…。あの時はトラック
がすごい勢いで突っ込んできたから怖いと思う暇もなかったけれど、
今となつては思わず身震いする。もうあんなのは勘弁してほしい。

歩いているうちに木々の生い茂った森を抜け、大きな平原に出た。
そしてその道の先に街が見える。あそこがイベリアか。俺と忌月は

顔を見合わせた。
さあ行こう、とまた足を踏み出した。

「きゃあああ
!!!!!!!!!!」

…ホワイ？ 淑女の悲鳴が？
俺と忌月同時に足を止める。それから恐らく声の聞こえる方である左方向を向いた。

「そ、その人たちいー！ た、助けてー！！」

走ってくるのは、長く、ところどころはねた、銀色のウェーブした長めの髪を持ち、蒼色の瞳をした白い肌のいわゆる美のつく少女。
うん、ここまでいい。

「…エンド、あの女の子の後ろからやってくる大量の犬はなんだろうか」

「モンスターだな」

「物の怪けですよね、あの犬。…確か、ぶらつくどつくとか書いてあった。人襲うとかも書いてあった」

「…んで、あれ襲われてる状態だよな？」

「うん」

森出ていきなり戦闘？ どんな強制イベントだよ。正直言つと戦うというのはあまりしたくない、けれど、…助けないって選択肢は初めからない。

どれだけ今の俺達が通用するかもわからないけど、放っておけない。

それは忌月だって同じようだ。

「おい！ 早くこっち来い！」

「は、はいいー！！！」

黒い犬達が女の子をすごい勢いで追いかける。俺はそんな凶暴な犬
…モンスターに追いかけられる女の子の方に走る。

武器も何も持っていない俺が特攻してくるのに女の子は大きく眼を
見開いた。

「き、危険です！ 素手で敵うような相手じゃ…！」

「わかってる！ 数があればあるの恐えし、まだ俺よく戦い方わ
かってねえから戦わない！」

「はい？ どういう意味ですか…？」

俺は女の子のところまで近づくと、そこからぐん、と加速し、女の
子の腕を取り、また走りだす。

忌月に目線でなんとかするように頼んでみる。すると忌月は露骨に
困った顔をしたが、それでも頷いた。

「は、速い…」

「走るのは自身があるんでね！ …ああもうまどろっこしい…！」

「はい…？ うひゃっ！？」

俺は引つ張って走るのが面倒くさくなり女の子を抱き上げた。走る
のがあまり速くなかったので行ったことだったがこれってセク
ハラにならない…よな？ 女の子は真っ赤になってたけど走りすぎ
て疲れたのだろうか。そう考えると、走りまわさせたあの犬達に怒
りがわいてくる。

「忌月！」
「りよーかい！」

戦うつもりはない。勝てるかどうかもわからないし、数があの量だ。魔法が使えるようになったからといって、威力もいまいちよくわかっていない。もし逆効果になったら最悪だ。だから確実な手段。

「【煙玉】！！」

忌月の振上げた手に小さな魔方陣が浮かび、そこに靄がかかったような球体が出来上がっていく。

前の世界で生きてた頃に使っていたらしい術。：いや今は魔法か。魔力と霊力の使い方が似ていたらしいのでいくつかは出来たと言っていた。その中の一つ。

いくらモンスターだといっても犬型だ。確かブラックドックも、その眼より鼻に依存している。それを利用した術、：じゃなくて魔法。ちなみに出来たと教えてもらったときの会話。

『エンドー！ 煙玉が出来たんだ！』

『へーよかったな…、煙でんの？ 消臭効果とかけれん？ 部屋干しは臭いがな…』

『…出来ないこともないけど、なんでエンド洗濯干してるの…？』

あのときの俺グツジョブ。忌月に変な目で見られたけど気にしない。忌月の放った魔法は俺達とブラックドックの間に落ち、ばふんつという大きな音と共に広がる。

目晦まし用の白い煙がもわぁ、と立ち上りブラックドックを覆い隠す。ブラックドックは先ほども述べたように、辺りを把握するため

に眼よりも鼻に依存している。その鼻が使いようもなくなったら、その動きを止めるようだ。

「忌月！ お前も早く来い！ 街の方へ走るぞ！」

「は、走るのっ!？」

忌月が絶望的な声で叫んだが気にしてられない。俺は女の子を抱えたままイベリアの街に向かって走った。女の子を落とすといえないので、加速はあまりしない。

忌月の弱々しい声が聞こえたが、気にせずに走り続けた。

ギルド登録できました

「あ、あの、ありがとうございます！...！」

なんとかブラックドックの群れから逃げて、イベリアの街のその前の道でようやく足を止めることができた。

俺はもともと体力あつたけれど、忌月の様子が誰から見ても可哀想な状態だつたけれど今はスルーしておく。

「わ、私はセフィル・トリーックと申します、こ、このご恩は一生忘れません！」

「そんなに重くはなくていいんですけど...！」

「いえっ！ それじゃ私の気がすみません！ なにかお礼できればいいんですけど...！」

「あー...ならば、イベリアの街のギルドまで案内してくんね？ ギルドに登録したいんだわ俺ら」

「そ、それだけでいいんでしょうか...？」

「十分だから気にすんな。おーい忌月ー、そろそろ行くぞー？」

すっかりバテてしまっている忌月に声をかけると、おあー...、と弱々しい声をする。なんとか立ち上がるも、歩くのがふらふらだった。なあお前の体力本当いくつなんだよ。

「た、体力回復の魔法なら私使えますよ？」

「体力回復？」

「はい、私治癒魔法が得意で...、かといって効果はあまりないんですけど...！」

「まあいいや、かけてやってくれるか？」
「は、はい！」

セフィルはとたと忌月の前に行くと、背中に手を当て、目を閉じる。微かに魔力がふわり、と浮かび上がった。

「治療魔法回復系第十三章【休息^{レスト}なれ】」

緑色の光がセフィルの手から淡く零れ粒子となって変換される。時間にして数秒。セフィルが手を離す頃には忌月の汗も引いていた。

ちなみに魔法の名前の前に言っていた言葉は詠唱ではない。もう少し力をつければそれも短縮できるのだが、あれは本から得た魔法にありがちなことだった。

詠唱ではないが詠唱と似たような効果もあり、違いもいまいわからない。けれどウェイブがそう言っていたからそうなんだろう。

「あー…ずいぶん楽になった…、ありがとー、せ、せふいるさん」
「？ はい」

「もっと鍛えろよ？ さすがに俺も泣けてくるレベルだね。なんか哀れみ系で」

「エンド！」

酷いよっ！ と言ってくる忌月の頭をチョップして、なら頑張れ、とだけ言っておく。こいつは優しい奴だし、魔法を使うのも上手かった。きつと努力もするだろう。

「セフィル、じゃあ行くか？ 案内頼んだ」

「わかりました！ ご期待に沿えるよう努力させていただきます！」

「…そんな真面目腐った口調やめない？」

とりあえずセフィルを先頭にして、俺達はイベリアの街に入る。そこはずっと昔のヨーロッパのような風景で、思わず目を瞠る。けれどなんとなく思う。これはまったくの別物なんだなあ、と。しばらく進み続けると市場も見えてきた。美味そうな飯の匂いが鼻をくすぐる、が今は違う違う、と頭を振って入れ替える。

「賑やかなんだねー…」

隣で忌月がぼそりと呟いた。

「いいんじゃないか？ 俺は活気あるほうが好きだぞ？」

「まあ楽しそうだよな」

「ふふっ」

そんな当たり障りのない会話を俺達はした。

人々はやはりなんていうかファンタジー。髪の色とか瞳とか。それだけじゃなくまんま見た目が狼の人とか、猫の人とか、なんかいろいろな人がいて面白い。

なんかいかにも冒険者のように大剣背負ってたり、魔法の際に使うようなごつごつした杖を引っさげてたり、さまざまだ。

柄の悪いような人たちもいたけれど、それはあまり係わり合いにならないでおこう。そういう人もつき物だったことは理解できるが、進んで交流するほど馬鹿じゃない。

「あ、見えてきましたよ！ あそこがギルドです」

「へえー…あそこか…」

「私も登録してるんですよ？ まあでも、難しいのは無理ですけど…」

見えたのは大きな建物。入り口の横にはギルドの看板が取り付けられている。

冒険者らしき人たちがそこから出たり入ったりして、いかにもだ。

「じゃあ行くか。セフィル、ありがとな」

「いえ！ お役に立ててよかったです！ また必要なときがあったらかけつけますので。ではさようなら、エンドさん、キゲツさん！」

「ああ！ ……って俺エンドじゃなっ！」

「じゃーねー」

「…この全ての元凶が…！」

「へ、え、なにがだよ？」

「…もついい！ 行くぞ！」

「あ、うん…！」

腑に落ちないという顔をした忌月を引つ張ってギルドの中に入る。入り口のすぐ横に受付らしきものが見えたので、そこに直行する。

「あーあの、ギルド登録したいんですが…」

「はい？ 登録でしゅっ、か？」

「……」

「……」

「……」

「噛みました」

「あー、うん」

真面目そうなうえに無表情で言われた。そしてかなりの美人さんだった。黒髪を高く結び上げていて、きちっとしたポニーテール。緑色の少しつりあがった瞳に、銀色のフレームの眼鏡をかけていて、鋭利そうな雰囲気がある。

ギヤップと言う奴か…？　と思索していたら無表情な顔が怪訝そうに歪められた。

「…登録しないのですか？」

「あー登録しますます！　ほらエンド、早く」

「わかったわかった…」

「ではまずここに名前を記入してください。それからギルドの利用規約です、契約書にサインを」

「はいはい…」

言われたとおりに書き進める。

「書き終わりましたか？　それでは用紙をこちらに。次はこの水晶に血を一滴垂らしていただけますか？」

「うっ、…まあそういうもんだよな」

「どうしたの？」

「いいや…、お前は平気そうだな」

「はあ？」

一緒に出されたナイフで指を切りつける。いやはや、自分で自分を傷つけるのに結構勇氣はあるだろ…。ちなみに忌月は平然とやってのけていた。…ちくしょう。

ぼたり、と血が水晶についた瞬間一瞬だけ光り、血の後は跡形もなく消えている。

「登録完了しました。あと、これがカードになります」

「はいはい…って早いなー…」

「か、かあど…かあどね。うん」

「……？」

「あー気にしないで。そういえばお前名前なんていうの？」

「イクシィ・ラメットと申します。他に質問はありませんか？」

「あーないだろ。うん、だいたいはわかるし」

「了解しました」

やはり真面目だ。

依頼と糸目の少年

「…そういえば、貴方たちは二人で依頼などを？」

「ん？ そうだけど？」

「でしたらパーティとして登録したらどうでしょうか」

「…そのつもりだけど…、登録？」

「ええ、そうしたこちらとしても正直楽ですので」

「…はつきりそんなこと言うんだな…」

無表情でそんなことを言うものだから愛嬌があるのかわいのかかわからなくなってくる。美人さんには違いないんだけどさ。

「登録するならパーティ名を決めてください」

「え、名前つけるものなの？」

「そうしないと区別がつかなくなるでしょう？ 別々に依頼をこなしたとしてもそのパーティの成果となるのであなた方も都合がいいかと。あとから人を加入させることも可能です」

「うーん、名前か…」

特に俺にはネーミングセンスないし…、忌月になんかいいのあるか？ と聞いたらエンドが決めて、と丸投げされた。とりあえず足を踏んどく。ふぎゃつとか悲鳴が聞こえたけど気にしない。

名前…俺達に關係するものとか…、…死んで転生して…。

「あ、そうだつ、これでいいか」

「エンド？」

「<コンティニュー>で登録します…」

「え、？ こ、こんでぬ？」

「了解しました」

「え？ え？」

どういう意味かわかっていなさそうな忌月を放っておき、俺は手続きをする。

紙にすらすらと文字を書きながら、なんとなく思うけれど、正直、俺は今ワクワクしている。これからのこの世界で生きていくことに対して、だ。

もちろん前の世界への恋しさはあるし、家族に会いたい気持ちもそりゃあある。間違いだか罪に早く気付きたい。

けれど、だからといって、この世界を嫌えるわけじゃないのだ。

忌月だってウェイブだって、いい奴がこの世界にいる。まあまだまだなにもわからないような俺だけれど、それでも、精一杯やっていけたらと思うのだ。

今俺らは、壁に貼られた以来の数々を眺めていた。いや、主に俺ばかりなのだが、ちなみに今の自分の様子。

「料理料理料理……料理料理料理料理……」

…おそらく、おそらくだが、今の俺の状態はおそらくたいそう不気味なものなのだろう。引き気味の苦笑の音が忌月からしているし、

自分にも自覚はある。

けれど、だ、考えてもみてほしい。経験のない自分がいきなりモンスター討伐のような依頼が出来るだろうか。背伸びして無理な依頼をこなすより、こつこつ身の丈にあったものを探す方が…、

「本音は？」

「今すぐ料理したい俺の両手が疼く辛抱ならん」

おつと口を滑らせてしまったようだ。いささか厨二病に近い言動もした気がするが気にしたら負けだ。

俺の言葉を聞いて忌月は思いつきり呆れた顔をしたが、特に文句もないようだ。さすがにいきなりモンスター討伐は無理だと忌月自身も思っているようだ。

「んー？ キミら新入りくんか？」

「んあ？」

「へ？」

いきなり声をかけられて、振り向くとそこには青髪に糸目の同い年くらいの少年がいた。周りのごつごつとした大人の冒険者達と比べると、少し異質のように感じる。けれどよくよく考えれば俺達も似たようなものだし、俺達くらいの歳の人たちも他にもいそうだった。けれどいきなり話しかけてきたことに驚き、俺と忌月は顔を見合わせる。

「…えーと、新入りです、はい。お前は？」

「ボクはロストいうん。よろしくなあ」

…ん？

「えーと、俺忌月って言います、こっちはエンド」

「あ、おい」

「なるほど、キゲツくんToEndくん、よろしく」

「こちらこそ、え、えと…ろすと、さん」

「発音おかしいような…まあええわ、さんづけはいらんで？」

…俺はエンドじゃねえ、と言おうとも考えた、けれど、その前に…、

「か、関西弁っ！？」

「かんさいべん？」

「なんやそれ？ なんかの弁当か？」

関西弁は日本語じゃねえか！ なんでそんな風に変換されるんだよ！
…いや待て、外国でも地域によってなまりがあるらしいから…、こ
こでもそんななまりにそ沿って、俺の知ってる言葉のうちで反映さ
れる…とか？

ああもう深く考えるな考えたら負けだ！ 異世界なんだからここは！

「ああーそうそう、そういえばキミな、さっき料理やらなんやら言
つとつたやろ、その^{クエスト}依頼受けたいん？」

「あ、ああ…、とりあえず料理したくてたまらない」

「…エンド…」

「…なんや変わった子やなあ…、くくつ、気にいったわ。料理の依
頼なら確かここらへんに…ほら、あったで？ 上から違うの貼られ
とつたからなあ。これ、『料理人募集』の依頼」

「お…まじで！？ ありがとう！ 忌月、行くぞー！」

「え、ちよつと、まず受付の人に言わないと…！」

「あ、そうだった、言ってくるな！」

だつと駆けていく俺。そんな俺の後ろで会話が聞こえた。

「エンドくん面白い子やなかー、君らいつから一緒なん？」

「ついこの間からですよ。…俺もエンドのこと、すごいって思うし、尊敬してるんです」

「尊敬？」

「ええ、…俺は、きっとエンドみたいになれないですから」

なにやら俺のことを話しているようだったが、気にせず受付のイクシイに依頼のことを話す。俺のテンションの高さに変な顔をいていたが、事務的に受理をしてくれた。

俺は渡された用紙を持って忌月の元へと向かう。

「やってきた！ …けどお前は どうする？ 料理したいの俺だけだけど…」

「まあ付き合うよ。パーティー組んだんだしさ」

笑って言う忌月。わかってたけどやっぱりこいついい奴だな。

「まあお二人さん頑張ってるなあ、ボクはボクのやることがあるから行ってくるわ。エンドくん、キゲツくん頑張ってるな」

「はい」

「…結局俺はエンドなのか…、どんどんエンドが広まってくるのか…」

「…もうどうでもいいや、忌月、さっさと行くぞ！ 場所はサニー食堂だ！ ほら早く」

「あ、待ってよー！」

料理、料理料理料理！！ なにか作れるのだろうか、料理人募集と
言うくらいだ。

俺は胸をワクワクさせながら、忌月を置いていく勢いで走り出した。

依頼と糸目の少年（後書き）

パーティ名決定。

とにかく料理がしたいようです。

頑固親父と料理人

「断る」

店に入り、依頼を見せて数秒。頑固そうないやにたくましい店主に断られました。

「ってはい！？ いきなり断るってどういうことっすか!？」

「どうしたもこうしたもねえよ。こんなガキに包丁なんか持たせられるか」

「なにおう！？ 俺は料理したくてここまで来たんだよ！ それなのに料理の腕も見ずに帰れ？ んなのありかよ!」

「腕？ お前みたいな経験もなさそうなガキに厨房は任せられるか！ 他の奴を呼んで来い!」

この頑固親父、聞く耳持たねえ…。

口調は乱暴な亭主だったが、おそらくこのおっさん自身が作ってあるだろうこのサニー亭の料理は美味そうだ。実際に食べてはいないが、料理の匂いが違う。素材本来の旨みを生かして、余計な調味料を使用していなさそうだ。このおっさんの腕もかなり良いんだろう。

で・も！ それでどうして俺に料理をさせてくれないんだ！ ウェイブのところでのこの世界の食材についてすごく勉強したさ！ モンスターや魔法のうんぬんかんぬんよりも頭の中にスムーズに知識として入ってきた。それに忌月やウェイブにも絶賛されているんだ！

「だめなものはだめだ！ さっさと出て行け！」

「見た目で判断するなよ！」

「はんつ！ お前みたいなのがなにを言ってる！」

「さつきからガキガキガキって……！」

さつきから堂々巡りだ。けれどこのおっさんは本当に頭が固そうだから、もしかしたら無理なのかもしれない、と諦めの気持ちが湧く。それに気付き、いけないいけない、とその考えを打ち消した。

「あの一……」

「お前みたいなの奴に任せられる料理はない！」

「だから実際に見ろって！」

「見んでも想像つく、……お前見れば新入りの冒険者じゃないか？」

つは、こんなことしてる暇があったらモンスター退治でもしてきたらどうだ？ まさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじゃないか？」

「なんだと……っ!？」

「あのおっ……！」

一瞬頭に血が上りかけたが、忌月の声ではっと我に返る。親父に怒鳴られてから、忌月はさつきから困ったような顔でおろおろしていたが、意を決したように大声を上げた。

「なんだあ？」

俺と同じように怒りで我を忘れていたおっさん。忌月にかける声も些か怒気孕んでいた。

「……亭主さんって、顔怖いし、背も高いし、声低いし、力も強そう

だし、なんていうか、料理人には見えませんよね…」

「はあ？」

「…なんだと？」

おいおいおい、火に油注いでどうするんだよ、と声に出そうとする前に、おっさんが前に歩み出た。

「俺を馬鹿にしてるのか…？」

「すぐ怒鳴るし、威圧感あるし、料理人っていうよりは冒険者ですよね…」

「…てめえ」

「つまり、貴方は料理人に見えません」

「忌月うっ！？」

「…余程俺を馬鹿にしたいようだな…？」

おっさんの顔がまじで怖い。極道のような見た目のうえに声も低くその声で怒られるのはまじで怖い。

けれど忌月はおっさんから目を離さずに堂々と立っていた。

「あなたが俺達のことを見た目で判断したから、こちらもあなたの対応と同じ返しをしただけですが、それで問題があるというのですか？」

「ぱちくり、と。俺は一瞬忌月が何言っているのかわからなかった。馬鹿だからじゃない、びっくりしたただけだ。」

確におっさんは俺のことを見た目だけで料理が出来ないとか厨房に入るなどが、そんなことばかり言っていた。正直俺も良い気分じゃない。けれど、それはおっさんの方にも確かに言えることだ。

「俺達の歳で経験が浅いと考えるのも本来おかしいはずですよ。それ

ならあなたは、一度も料理したことがないけれど成人した人になら料理を任せられると？ 厨房に入れられると？ あなたはそう言いたいのですか？」

「んなわけ……」

「なら余計な先入観は取っ払って考えてください」

……なんだろう、忌月。

俺、料理したいだけなのに、なんでこんな状況なんだろう。

忌月の言っていることは正論。これに言い返すことなんてできないだろう。お前口喧嘩強かったのか、……いや、これは喧嘩じゃないか。お前怒ってないし。

「お願いですから、見た目だけで全てを拒否してしまうような、視野の狭い人にはならないください。俺の元いたせか……、国では、主に女性が料理などを行っていて、それが当たり前だといつの間にか俺は思い込んでいたんです。

……でも、エンドは違いました。俺が思い込んだものを、自分から進んでやっていて、むしろ好きだとさえ言っていたんです。俺のいた国は男尊女卑の風習が強く、女性が行っていた家事を、好きだからやっている、と知って俺は驚きました。

……あなたも、料理は好きでしょう？ そのことを、わかってください」

なんていうか。

なんていうか、俺は忌月の元いた世界のことはまったく知らなかった。教えてくれなかったし、あまり言いたそうじゃなかったから、俺も聞かなかった。

けれどそういう風習があって、でも、俺のことでそれを改めてくれて。

……なんていうかなあ。

すっげえ嬉しいわ。

「……俺も頭に血が上っていたようだ、すまない」

「え、えあ、はい……」

…謝られたよっ!?! 忌月すげえ…。このときばかりはまじで忌月を尊敬したね。

けれどまだ忌月の顔は曇っていた。そのことに俺が眉を顰めるまえに、忌月の口が開く。

「…先ほどの言葉…」

「…ん？」

「『こんなことしてる暇があったらモンスター退治でもしてきたらどうだ？ まさか怖くて出来ないから、こんな依頼に来たんじゃないか？』…という言葉について、謝罪してください」

「おい、忌月？」

一字一句間違わずに覚えてたのかよ？ と、あまり関係ない突っ込みを脳内で繰り返す。

「…これはエンドのことじゃなく、あなた自身の仕事のことに関しても、侮辱しています。人を蔑んで、そのうえ自分の仕事を馬鹿にしてるんですよ？ いくら頭に血が昇って言った言葉だとしても、それはあなたにとって許せる言葉ですか？」

ここで気付いた。多分、この言葉に関してだけ、だけど、恐らく俺に向かつて言われた、このおっさんにとってまったく関係ない暴言… 理不尽な言葉。

これに対して、忌月は少し、怒っている。

「…エンドはモンスター退治に怯える臆病者じゃない。」

「してください。」

謝罪、

頑固親父と料理人（後書き）

忌月くん怒りました。怒ると怖いんです、多分。
多分エンドくんぽかーん状態です。

故郷恋し

なんていうか、なんというか。

忌月に押されてだかどうだかわからないけれど、あのおっさんから丁重な謝罪を頂いた。どうやら自分でも言いすぎの自覚は合ったらしい。

俺達があまりにも若かったから、ちゃんとこなせるか不安になって、つい断るなどと口から出た上に頭に血が昇りあんな言葉を吐いてしまったとか。

見た目は怖いし、短期だけれどそう悪い人じゃないらしい。そうだよな、悪い人間がこんな美味そうな料理作れるわけないし。それで今俺は、厨房にいる。やっと入れたぜ…。

「まずは、なんでもいいから料理を作ってくれ」

「なんでも？」

「ああ。出来るだけ時間のかからないものがないな」

「了解つす」

俺は厨房にある野菜を見てみた。じゃがいもにんじんピーマンetc…、この世界は食材も前の世界とあまり変わらない。まあそりゃあここにしかないものも、ここにはないものもあるけれど。

とりあえず…、料理だ、料理料理料理…イヤッホオオオオオオイ！
！！！！！！！！

まずは材料！ 何の卵かはしらんけど手ごろな卵を頂く。それにこれまたなんの肉はわからないけど肉！ 多分獣肉的なあれなのだろうか…。それにピーマンと玉ねぎ、その他もろもろ。

まずは肉を細かく切る。玉ねぎもみじん切り。ピーマンも種と軸を取ってみじん切り。あとイベリアキノコ（この近辺で取れる特産品）を四つに分けて切って、水につける。これはイベリアキノコの臭みを取るためだと本に載っていた。

ソースにケチャップ、あと乾燥した魚やら野菜やらを使って作ったダシに塩コショウ、香辛料としてイベリア草（この近辺で以下略）を乾燥したものを砕いたものを炊いたご飯に混ぜる。

それからホワイトソースを作っておく。これは作ってから違う場所に置き待機。

フライパンにサラダ油を投入し、肉、玉ねぎを炒め、少し立ってからピーマンとイベリアキノコを投入する。それからさっき作ったご飯を投入。混ぜながら全体で炒め上げる。それが終わったら皿に載せて形を整える。

そして最大の難所、卵。バターと油を塗ったフライパンに溶き卵を一気に流し込む。円を書くように混ぜながらいい半熟具合のところでご飯にぶっ掛ける。そこに先ほど作ったホワイトソース投入。ちゃんと暖めておかないと。

見映えのいいようにパセリなどを乗つけて…出来上がり！

「出来たぜおっさん！」

「ほう…」

ずっと俺の手際を見ていたおっさんが感嘆の息を漏らす。俺の手にあるのはオムライス。そりゃあ半熟具合にふわっふわに仕上げたぜ！

おっさんがスプーンを持って、俺の料理に一匙入れる。ぱくり、と。食べてから大きく目を見開いた。

「うまい…」

「おお！ どうだ！」

「…見た目で判断するじゃないってことだな、本当に。…俺が間違ってたよ。悪かった」

「べ、別にもういいよ！ 俺、料理出来ただけでもういいし…」

本当に怒っているわけじゃなかったのだ。つい、俺もムキになってたけれど、料理人のおっさんからしてみれば、こんな俺みたいなガキに厨房を任せるとか、あまり我慢ならなかったんだろう。

だから、本来おっさんが怒るのは当然のことだったし、もうそのことについては怒るつもりはなかった。

そんな俺の様子に、おっさんは眉を八の字にして笑う。

「っは…、本当にお前は、料理が好きなんだなあ…」

『まったく燕斗は、本当に料理が好きなんだなあ…』

…あ、

「父…さん…」

「ん？」

「あ、いや、なんでも…」

まずい。今のはまずかった。全力でこれはまずい。被ってしまった。そう見えてしまった。父親の優しげな顔に。もう、会うことはないだろう、父親に。

「ちょ、ちよつと外の空気吸ってきます！ そのオムライスはどうぞ食べてください！」

「あ、おい！」

俺はおっさんに顔を見られないように厨房から外へ出た。ドアを開けて出た瞬間、料理が出来ないので外の掃除中だった忌月とぶつかる。

俺はその場所に尻餅をついた。忌月も俺と同じような体勢になる。

「いったあー…いきなりどうしたんだよエンド…、…エンド？」

「……」

「どうしたの？ エンド」

「……」

「…すごく泣きそうな顔だよ？」

「……っ！」

「あの人に嫌なことされた？ 怒られた？」

「…違うわ馬鹿」

「ひどっ！？」

なんとなく、昔の記憶がフラッシュバックして、頭の中がこんがらがって。

また、会いたくなって。

「どうしようもないのになあ…」

「どしたの？ エンド」

「なんでもねえ…、少し外の空気が吸いたくなっただけ。大丈夫だ、心配すんな」

「……、うん。わかった」

俺の様子がおかしいことに気付いてるはずだ。けれど、なにも聞か

ない。その優しさが、すごくありがたかった。
なんてことはない、ただのホームシックだろ、俺。家族は向こうで
生きているんだ。幸せでいてくれるんだ。…きつと俺が死んで、
悲しんだらうけど、けれど父さんも姉ちゃんも、強い人だから。
だから、大丈夫だ。

「エンド、それでさ、料理はどうだった？」

「おう！ ふわっふわのオムライス、おっさんに大絶賛だったぜ！」

「おむら…？ エンドの故郷のご飯？」

「そうそう。今度お前にも作ってやるからな」

「わぁ、楽しみだな」

多分これから先も、俺は前の世界でのことを恋しがるだろう。家族
のこと、友達のこと…。どれもこれも大切なことだから。
それでも、なんとかこの世界で生きていこうと思う。

「これから頑張ろうな、忌月！」

「うん！」

にかり、と忌月が少年らしい笑みを浮かべながら、片手を上げた。
俺も似たように笑いながら、その手に向かってパァンッ、と自分の
手を合わせた。

宿が決まりました

「親父い、料理の味がいつもと違うなあ！」

「気付いたか、今料理人一人雇ってんだよ！ ……娘が旅に出ちまって大変だからな…」

「へえそうかい…もしかして男でも出来てたりするんじゃないのか？」

「んなつ！！ そんなわけあるか！」

「おお恐え恐え」

昼時になると店の中に人が続々と入ってくる。そのほとんどが冒険者の格好をしていた。

ちなみに一応冒険者な俺は鍋にブランデーを入れてフランベしている。…俺やっぱり料理人のほう目指そうかな…。

おっさんは料理をしたり皿を運んだりと大忙しだ。ちなみに忌月はやはり掃除をしている。

こっちを手伝わせようかと思っただけど、…こんな忙しく、体力を使っようなことはやらせたらいけない気がした。早く体力つけるよ？

「おいエンド！ 次肉定食三つだ！」

「了解！」

ちなみにこのおっさんにもエンドと呼ばれている。もうわざわざ直すのも面倒くさくなってきた。

俺は手早く鍋の肉を皿に盛り付け、ご飯を山盛りに入れていく。冒険者だから腹空かすだろうというおっさんの配慮だ。やっぱりこの人

はいい人なのだろう。

「おっさん、出来たぞ！」

「おうよ！ 次は魚定食四つだ！ 急げよ！」

「わかった！」

ちなみにおっさんは俺が肉定食三つ作っている間に肉定食四つに魚定食三つ作っていた。やっぱりプロは違うな…。けれど俺でも少しは誰かの役に立ってるらしいのでなんとなく嬉しい。

まあ、そんなこんなでピークを過ぎた頃。

「ったく、助かったよ、お前案外筋がいいんだな」

「まあね」

自慢げに答える俺。おっさんみたいに早く作れなかったけれど味は間違いなしだ。そこは本業との違いだろう。

「ほら、これは給料だ」

「え、そんなのギルドで…」

「これはさっきの暴言も含めて、だ。悪かったな。受け取ってくれるか？」

「は、はい…」

おっさんの手から銀貨二枚貰えた。ちなみに、ここでは銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、金貨百枚王貨一枚、だ。

ちなみに、この依頼の報酬は銀貨二枚。通常料金よりも少し多めにもらえるくらいだ。その二倍。うはあ、と思わずため息が漏れ

た。

「そつだ、おっさん、ここら辺に宿屋つてあるかな」

「ん？ それならこの近くに一軒あるが」

「そつか、それつてどのくらいで泊まれる？」

「飯代抜きなら一泊銅貨十枚だ。銀貨一枚で十日泊まれる」

「じゃあそこにしようかな…、おっさんありがとう」

「おいちよつと待て、」

「うん？」

忌月に知らせに行こうと思つたが、おっさんに呼び止められる。

「お前宿探しているのか？」

「うん、俺ら今日来たばかりだし」

「そつか…」

「おっさん？」

「だったら俺の家を宿にしたらどうだ？」

「……へ？」

「お前の料理の腕はなかなかのもんだ。客にも評判が良かった。そこで、だ。依頼の仕事がないときに、この手伝いをしてくれればそれで宿代はチャラ…、どうだ？ お前にとつて悪い話じゃないと思つが」

「乗つた！」

即答だつた。そりゃあそつだろう。俺が料理をするだけで宿代になるのだ。しかもすることといえば俺の好きなこと。確かに忙しかつたけれど、辛いわけじゃない。

「まじで？ まじで言つてる？ 嘘つて言わない？」

「おう、男に二言はねえ。改めて紹介だ。俺はゴート・ロツケン。

まあおっさんでも親父でも好きに呼べや」

「おう！ よろしくな！」

俺達くコンティニューへ、依頼が完了した上宿も決まりました。

「…いつの間にそんな話を…」

「なんか奥さんもいるらしいんだけど、両方とも娘が旅に出て寂しいからってさ大歓迎らしい。やったじゃん、宿代浮くぜ？」

「でもその代わりエンドが働くことになって…、いいの？」

「むしろやりたい」

「…そうだね、エンドはそうだったね…」

ギルドに戻り、報酬を貰った。俺がご機嫌だったのでイクシイに変な目で見られたが気にしないでおく。

たくさん料理を作れて大満足だった。そのうえおっさんのところを宿に出来るし、また料理できるし、万々歳だ。

「おんや、また会ったなあ」

後ろからさつき聞いたばっかの声を聞こえた。振り向くと青い髪に糸目の関西弁の人。

「ああ、ロストか」

「どうやった？ 依頼。料理できた？」

「満足！　しかも宿も手に入ったし、いいこと尽くしだよ」

「ほーか、そら良かったな。なあなあ、そんなに上手なら今度ボクにも作ってな？　女の子の手料理やないのは残念やけど…」

「悪かったな男で」

「ちやうねん聞いてや！　この前誰かのパーティに入って依頼こなしたんよ、まあそれが一日では終わらんくてな、野宿することになったんやけど…、そんときの飯がまずうて！　ありえんわあれ…、おかしすぎるわ、ほんま」

「なんだよそりゃ…」

「あ、もしキミら、なんやそいう依頼があつたらボクも協力してもええで？　おいしい料理食べれんのならキミらに着いてくほうが絶対ええわ。いくらたくさん金払ったとしてももうあのパーティに着いて行きとくない」

「どんなもん食つたんだよ…、まあそいうときがあつたら頼むわ」
案外こういう軽い調子の冒険者もいるんだな…、と俺は少しだけ安心する。ってか本当何食つたんだよ。

そのとき、ロストに違う男から声をかけられた。

「ロスト、リト知らない？」

「ん？　なんやまた振られたん？　アーク」

そこに来たのは焦げ茶色の髪に綺麗な青色の瞳をしたすらりと背の高い男だった。顔は整っているが、どことなく軽そうな雰囲気があり、あの自称神を彷彿とさせた。

そのアークと呼ばれた男は俺達のこと気付く。

「この人たちは？」

「んとな、新入りくんや。エンドにキゲツ。あ、お二人さん、こん人はアークゆうん。同じ歳やから案外仲ようさせてもらっとるん」

「へえ、また同年代の人が。よろしく」
「よろしく…」

なんだか、確かに同年代の男だったけれど…どこことなく、空気が違う気がした。あれ、とエンドは首を傾げる。なんとというか、なんか違う。いや、違わないのに、なんか違う。いや、俺達みたいな違う世界から来たような、そんな空気じゃなくて、…なんなんだろう。まあ気にしなくていいか。

「あ、アーくんアーくん、この子な、料理美味いらしいん。珍しいやろ？ 冒険者で料理美味くて。今度日数かける依頼行くんやったらこの子持ってこ？」

「まじか。持ってけ持ってけ」

「…俺物じゃないんだけど」

なんだろう、料理人って人気なのだろうか。忌月が苦笑いしている。

「いやー、この前のときは俺吐いたからなー」

「そうそう、生焼けはないでほんまに」

…予想外に深刻そう。もし頼まれたら料理でもなんでもしてあげよう。

「他に同年代の人とかいるのか？」

「んあー、あああと二人おるよ。そん二人ペアくんどってな、可愛い女の子と男。なんや仲ようて…、ええなあ、ボクも彼女欲しいわ。そんくらいやわ、ボクが知ってるの」

「ん、そういえばせ、せふいるさんは？」

「セフィル？ あああの可愛い子か。あの子は確か年下。可愛いよなー、ほんと」

「確かエンドその子助けたよね、こっ、…ひよいつと」

「「ひよいつと!?!」」

「え!?!」

なんか忌月の言葉に男二人が妙にテンション高い反応を返してきた。
え、なんなのこれ。

「ひよいつと…抱き上げたんか!?!」

「え、ちよ、」

「なにそれ羨ましい! 俺なんかリトに振られっぱなしなのに!」

「それ関係なくね!」

なぜか攻められる俺。

この後散々詰問された。どっいつことだこれ。

家族に会いたいものです

「私はイマニー・ロツケン、歓迎するわあ」

ゴートさんの家に来て出迎えてくれたのは奥さんだった。薄緑色のふわふわした髪を後ろで纏めていて、優しそうな深緑色の目を瞳をしている。

なんというか、おっさんと同じ年と聞いていたが…、そうと見えないくらい若々しい。

「おい、飯の準備が出来たぞー？」

「あらあらー…、ゴートったらすっかり張り切っちゃって。ほら、いらっしやい、エンドくん、キゲツくん」

「はい」

「…結局エンドかよ…」

家の中に入ると、優しく暖かい匂いがふわり、と匂った。おお、と俺と忌月は同時に声を上げる。それから顔を見合わせて、おっさんがいるであろう部屋に駆け込んだ。

「あしたはどうする？」

「んーそうだなー…」

食事も終わり、部屋に案内された。そこは二人部屋で、もう独り立ちをした兄弟が使っていたらしい。ベットが予想外にふかふかで、その感触を楽しんでいると忌月が明日の予定について聞いてきた。

「どっかの雑務とかは？ んーでもなー…、やっぱりモンスター討伐とか経験しておいた方がいいか？」

「そうだよな。…料理はいつでも出来るんだし」

「お前体力的に大丈夫か？」

「む、そんなに馬鹿にしないでよ。俺だって男だよ？」

「…確か一般人の女以下…」

「うぐ、」

「…鍛えろよ？」

「うん……」

すっかり頂垂れる忌月を横目で見て、エンドはベットのシーツの中に入り込む。寝るぞ、と声をかければのそのそと忌月も同じようにベットに寝転がる。

「おやすみ」

「…おやすみ」

俺は目を瞑り、すぐに意識は闇の中に落ちた。

『「ら燕斗！ あたしのシャツどこやったの！」』

いや知らねえよ、姉ちゃんの部屋に置いといたから勝手に無くしたんじゃないねえ？

『燕斗ー、父さん今日はカレーがいいなあ…』

またかよ、一週間前にも作ったぞ俺。

『今日は燕斗の誕生日よね？ あたしが作ってあげるわー！』

姉ちゃんに出来るのかよ？

『むっ、これでもあたし、彼氏には料理上手だねって褒められてんのよー！』

『なっ、お、お前、か、彼氏いたのかあ！？』

『あ、やば』

『どこの馬の骨だ！ 家に連れて来い！』

父さん、そんなことより仕事は？

『お、おおお、今から行くぞ…、プレゼント買ってくるからな！』

…彼氏の話はまた後日…』

『父さん！ …ったくあんたのせいで…』

それ俺違くない？

『違くない！ …はー、もういいわ。あたし達も学校へ行きましょ』

『あ、そうだ…』

『燕斗、誕生日おめでとう』

「エンド、朝だよー！」

「……」

「エンド？」

「夢、か…」

ああそりゃわかってたよ、これは夢でしかないって。
もうあの世界で俺は死んで、家族とも別れて。
もう、会うことすら出来やしないんだってことは。

「あー…最悪だ…」

「なに？ 嫌な夢でも見た？」

「その逆。幸せすぎて泣きそうだった」

「…？」

「もうその話はいいよ、起こさせて悪かったな？」

俺はベットから降りて、服を着替える。忌月はもうとっくに着替えていた。早起きなんだな、こいつ。

忌月は俺の様子を心配そうに眺めていた。こいつはわりと鋭いから

困る。あまり心配かけさせたくないのに、すぐ俺の変化に気づくから。

「…エンド、俺はさ、この世界にこれて良かったと思うよ？」

ぴたり、とつい俺の動きが止まってしまった。なにこれ、わかりやすく動揺してんじゃねえか、俺。

忌月は静かな口調で続ける。

「最初は、なんだこれって思ったけどさ…、この世界に来たおかげで、ウェイブさん、ゴートさん、イマニーさん、ロストくん、アーくん、そしてなにより、…エンドに会えた」

「……忌月、」

「それは俺にとってなによりもの幸福に思えるんだ。だから言いたい」

真っ直ぐに忌月は俺の方を向く。それから、にかり、と歯を見せながら笑った。

「エンド、この世界に来てくれて、…ありがとう」

……、なんだろうか、なんて、言え方がいいのか。

勝手に俺は死んだんだよ、家族置いて。違う世界に転生させられてふざけんなって思った。元に戻りたかった。でもさ、この世界に来て、ここで過ごして、この世界も、悪いもんじゃないんだろうなってさ。

「…うん、」

特に俺はすごい力を持ってるわけじゃないし、ただの料理好きの子

供だ。本当に、それだけだ。魔法を使えても、戦えたとしても、根本的なものは変わらない。それでも、必要としてくれるのなら、少しでも、頑張ろうって思える。

「…忌月、行くぞ」

「うん！」

着替えた俺は部屋を出る。忌月もそれに続いて出てきた。相変わらずの狩衣姿だ。

そこで、ふと、俺は考える。

こいつは、元の世界を恋しく思わないのだろうか。

「なにこんなお子様がこんなところに来てるんだあ？」

げらげらと男達が笑い声を上げる。

…わかっていたさ、冒険者の中にはいい奴ばかりじゃないってことも。今日はロストもアークの姿も見えなかった。いるのはこのいかにも嫌な奴らだけ。

いるんだよなー、やっぱり、こういう冒険者。新入りイビリが好きなの対して実力も無いくせに一流気取ってる奴。そういうの見苦しいつたらありやしねえ。

「…エンド、」

「ん？」

「全部口に出てる」

「まじでか」

恐る恐る冒険者の方々の方を見ると顔を真っ赤にして血管をぴくぴくさせている。やべ、まずったか。

「けっ、Fランクの奴らが俺達に楯突いてんじゃねーよ!」

「そうだ！ てめーらみたい雑魚は雑用でもやってたらいいんだよ!」

うわぁ本当に嫌な奴の典型的なパターンだ。俺は心の底からげんなりする。

ちなみにFランクというのはこのギルドのランクのことだ。F、E、D、C、B、A、S、SS、SSSという具合に分かれている。俺達はギルドに入りたてだからFランク。

余程新入りとイビリたいのかそのことをやたら強調してくる。

「こつという人はどこでもいるもんなんだなあ……」

ぼそりと忌月が小声で呟く。おうお前のところもか。やはり共通なんだよな…。俺は思わずため息をつく。その様子が気に障ったのかこいつの顔がまた一段と怒りで赤く染まった。あ、まずった？

「ったく舐めやがって…、こつという奴は一度痛い目みないとわからないようだな…?」

え、これなんのイベント？

「いやいやいや、暴力反対です、そういうのよくないと思います」
「はあ？ 怖気づいたか？」

「挑発はいいですからここは穏便に済ませましょ？ ね？」

俺と忌月で宥めようとする、けれど何故か男の顔はさらに怒りに染まったようだ。あれ？ 言葉の選択ミス？

これは殴られるフラグ？ どうしようかなー…などと半ば焦ってる
と、声が響く。

「見苦しいぞ」

凜、と透き通る声。見ればそこには金色の髪を横に長くたらし、後ろの頭の真ん中付近で縛った、翡翠色の目を持ったいわゆる美つく少年が。

「低レベルのものが低レベルのものを蔑んで、お前には誇りと言う
ものがないのか。見ていて気分が悪い」

「なんだと！？ ロード・クォーツ！」

「私の名前を呼ばないで貰おうか。汚れてしまいそうなのでね」

せ…、性格悪っ！？ なんか俺達も低レベルとか言われてるし…。
こんな奴も多いんだな…、とほろりと泣きそうになる。

ロードと呼ばれた男は優雅な仕草で依頼書を取り、受付へ行く。ちらりと見えたが、それはBランクの依頼書。なるほど、あいつらより格上なのですか。

「あの男性格悪そうだなー…」

「…？ エンド、なんか君勘違いしてそうなんだけど…」

「なんだ？」

「あの子、男じゃなくて女の子だよ？」

「…なんだと？」

美少年じゃなくて、美少女でした。

黒犬には注意しましょう

ただいま、森の中。

あれから男達もばらばらにどこか行ってしまい、なんとか依頼をじつくり見ることが出来た。

ちなみに俺達は採集クエストでここに来ている。イベリア草とイベリアキノコという特産品をとるだけだ。これはFランクでも出来る依頼。

モンスターが出る危険性があるからこうやってギルドに頼んでいるらしい。

「エンドー、こっちにもあるよー」

「りょーかい」

ううん、やっぱり、冒険者とかギルドとか聞いてると、なんだか危険な感じもしたけれど、こうやってのんびり依頼をこなすのもいいもんだ。

命かけてモンスター討伐より断然いいもんな。

「うわ、うさぎだ、可愛いなー」

「ほんつとのんびりだわ…」

のんびりスローライフで冒険者生活？ いいじゃんそれ、なんか楽しそう。

採集クエストはイベリア草イベリアキノコ両方とも30個ほど。

少し多めにサービスしとくか。あ、ついでに俺の料理の材料にも。

「グルルルルルル」

…ん？ 腹の音かな？ まったく、こんな大きな音出して！ しょうがねえな！

……違う、現実逃避と違う。これ明らかに腹の音と違う唸り声だけれど、俺は信じない。だから現実逃避と違うから！

「…エンド、ぶらつくどつくだよ。…多分前の子たちかな…、住処は確か森の中だし、俺達囲まれてるし、性格は執念深いから…」
「ちくしょうまたこの展開!？」

森の中で光る目。それが何十にも…、うわ、もしかや死亡フラグ？
戦うたって、そんなのウェイブのところまで修行して以来だ。うまく使えるかわからない。

「…忌月さんどうしますか」
「…どうしましょうかねえ」

とりあえず採集したものの鞆の中に入れた。数も十分。問題はどうかやって逃げ切るか、だ。

あの煙玉をもう一度使うか？ そう思うけれど全体的に囲まれている。逃げ道が無い。

「エンド、ここはもう覚悟決めるしかないんじゃない？」

「…平然と言ってるように聞こえるけど、お前の顔青いぞ」

「まじか」

「無理すんな。…でも、そうだよな、覚悟決めた方がいいのかもな
…」

なんだかんた言っつて、この前も逃げたけれど、実際は戦う覚悟が無かったただけだ。この場所での戦うってことは、命を奪うってことと同意義なのだ。

…あー！ 簡単なクエストのはずだったのに！

「忌月！ 行くぞー！」

「…わかった！」

両方とも臨戦態勢をとる。

なるべく殺さずに、逃げる形で！ 体内で魔力を練り上げる。
魔法はイメージ。魔力を練り上げて形にする。

俺は大量に魔力を消費するような攻撃魔法をするつもりはない。そうすればたくさんのものが命を落とすことがわかってる。

俺はクラウチングスタートの体勢をとった。背後は忌月が守ってくれている。

魔力を足に、少量だけれど、足の先とは反対側一点に集中させる。どうやら俺の器用さはそのまま魔力にも反映されるようだった。

「かそ…く…!!」

ぐわっ、と。風属性の魔力を一気に放出させ、風を起こす。一瞬からだが軽くなり、一気にブラックドックたちの前に出た。いきなり俺が出てきて、反応できないのかブラックドックたちの体が強張る。俺は両手に魔力を溜め、その場にはちんっと両手を叩きつけるよう

についた。瞬間ばふんつと音がなり、砂塵と共にブラックドックたちが吹っ飛ぶ。

これはただ風の魔力を起こしてその場に叩きつけ、強風を発生させただけだ。特に名前も無く、魔法と言うよりも魔力の放出により起こった風そのものだ。けれどこれのおかげで半数が怯んでくれた。

「忌月！」

「わかってる！ エンド、耳塞いで！」

俺は言われたとおりに両耳に手を当てた。忌月が両腕に魔力を溜める。それからばしんつと、その手と手を叩き合わせた。けれど、それだけで、ばしんつと音が森全体に響き渡るような強大な音となる。ブラックドックは鼻だけでなくその耳も精度が高い。ブラックドックたちがその音に驚き飛び上がり、腹を向けるようにして倒れた。泡を吹いているものもいる。

忌月の方にいたブラックドックたちも退治できたようだ。

「…ショック死、とか、ないよね？」

「多分大丈夫だ。…多分だけど」

なんとなく、両者とも嫌な気分になる。

それを抑えて、帰路についた。

なんとなくだけれど、こうやってモンスターを傷つけるのも、そのうち慣れていくんだらうな、とか思う。

きっとそれはこの世界では普通のことなんだらう。わかるさ、それはわかる。

「なんか物悲しいよね…」

「そうだな…」

「でも、覚悟決めなきゃいけないんだよなあ……」

「んま、そうしなきゃ、俺達がやられるんだからな」

「エント、」

「ん」

「頑張ろつな」

「ああ」

「どづいつことだ!?!」

ギルドに帰ると、そこには今日いた、あの新人イビリをやりそうな乱暴者の男がいた。どうしたんだ、と近くには寄らないが様子を見る。

その男につつかかられていたのは、青髪に糸目の…ロスト!? あいつなにやってんだ!?!

「どづいつこともなにも、キミらのパーティーに入りたくないゆうとるん。聞こえんかった?」

「だからなんでだつて聞いてるんだよ!」

あれは…ロストを勧誘してるのだろうか。俺達のことをお子様とか言う割には、俺達と同じ年のロストのことは勧誘するのか…、と呆れる。

そういえばロストは強いのだろうか。そこらへん、よく聞いていないから知らないのだ。

「だからなんだってなあ…」

「なんなんだよ!」

「だってキミらの料理まずいんやもん!」

…ん? あれ?

「肉は生焼け、植物をそのまま食べるし、保存食の乾いた食べもんばっか! 嫌になるよな、嫌にならん? ボクは嫌や!」

「そ、それだけで…!」

「それだけでなんやねん! これは重要なことやねんぞ!?!」

なんだか力説している。ほんとそこまでまずかったのか…。そう、ぎゃーぎゃー騒いでたロストだったけれど、ふと、静かになる。

なんだ、と思った瞬間、ロストの雰囲気 garaり と変わる。冷たいものを含ませたその空気に、知らぬ間に鳥肌がたっていた。

「…それに、キミ、えらい態度悪いらしいよな? 自分のランク以下の人を馬鹿にしくさって…ボク、そういう人嫌いやねん」

「い、いや、そんなことは…」

「そんなことは? なに? ボクな、弱いものいじめ嫌いなん知つとるよな? 前、注意したよな?」

「そ、それは…」

「悪いけれど、君のパーティ入ることはもう一生ないで? そこんところわかってな? いくら温厚なボクでも、…怒るで?」

そこで、ロストと目が合った。ぱあ、と顔が明るくなる。え、なに、と思う間に、目の前までロストが駆けてきた。

「ちようどええ! ボクはこの子らのパーティに入るわ!」

「「はあっ!?!」」

俺と忌月が同時に言う。なに、どういうことなの？ さっぱりわからないんだけどこの状況。

「いやな？ ボクな、最近パーティ勧誘激しいんよ、それならキミんとこ入ろうかなって」

「いやいやいや、意味わかんねえんだけど」

「ボクなあ、キミらみたいに変わった子の方が好きやねん、なんかすぐ戦い戦い、なんていう乱暴者よりかずうーつと」

「は、はあ……」

「それに料理美味いなら最高やん！ 最高やん!?!」

くるり、とロストが方向転換して、先ほどの乱暴者の冒険者に向き直る。それからいやに爽やかな笑みを見せた。

「このボク、ロストはこの子たちのパーティに入るの、もう勧誘はしないでください！ ……これでええかな？」

いやよくねえよ、なに勝手に決めてんだよ！

「あ、そうそう、ボクAランクやからそれなりに役に立つと思うので？」

いやだから…、ん？

…Aランク？

黒犬には注意しましょう(後書き)

仲間が増えたようです。

仲間が増えました

FランクからDランクまでに上がるのはさほど難しくない。問題はCランクからだった。

Cランクでさえ、あのブラックドックの群れを一撃で退治するくらいに能力が無いといけない。Bランクは、大型モンスターの群れに一人で立ち向かうレベル。そしてAランクは…、一人でドラゴンを倒しに行けるレベル。

ドラゴンというのは想像の通り強い。大きな牙、鋭い爪、ぎよろりとした目玉、長く太い尾…、SランクやらSSランク、SSSランクは存在しているだけであって、このギルドにはいないに等しい。つまり、Aランクということは 無茶苦茶強いということなのだ。

「……っ!？」

俺が何も言えないで口をぱくぱくさせていると、それに気付いたロストが間抜けな顔やなあ、とけらけら笑う。いや、お前のせいだよ。

「キミのパーティ、<コンティニュー>言うんやっけ? 入るわ入るわー、なあ? ええよな?」

「あ、うん…」

「お、おい待てよ!」

なおも追い縋る乱暴者の冒険者。そこまでロストをパーティ入れたのか。まあ、確かにロストはAランクらしいし、話を聞いている限りじゃ、一度あの冒険者ともクエストに行ったんだと思う。だからあいつはロストに頼み込めば、自分達のパーティに来てくれると?

「なあ、あいつらFランクなんだぜ？ あの程度の奴らなんかにお前は合わねえよ…、なんせお前はAランクなんだし？」
「……………」

ご機嫌をとるように男はロストに近づく。俺は、一瞬あいつがなにを言っているのかわからなかった。

聞こえるのは、ランクを強調する言葉。

…なんだこいつ、人をランクだけで区別してるの？

それだけで？ もしかしてそれだけの理由でロストを勧誘してるのか？

たった、それだけで？

「ロストはロストなのにランクだけで決めてんじゃねーよこのゴリラ」

「はあ!？」

「ぶっ」

…あれ？ 今俺、なに言ったっけ？

なんかロストさん腹抱えて笑ってんですけど。忌月さんすごく哀れなものを見る目で見てきてるんですけど、乱暴者の冒険者さん、さらに顔真っ赤にして怒ってるんですけど？

「て、めえ…!」

「わわわ、ちょ、タンマ！ そんなに怒らんで！ さすがにゴリラは悪かった！ 本当のことと言われるのって辛いよな！」

「んなつ!？」

「ぶほあっ!」

さらにふきだすロスト。え、俺変なこと言ったか？ …なぜか目の前の冒険者さんは怒りのゲージが振り切れてます。え、なんで？

「この野郎！」

ついに目の前の冒険者が腕を大きく振上げた。ちなみに男は体長2mに近いんじゃないかってくらい大男。あ、やべこれ死ぬんじゃない？ と、ぼんやり思う。

ってそんなこと考えてる暇ねえじゃん逃げないといけねえじゃん。でも、逃げるよりも男の拳が叩きつけられる方が十分早そうだ。

これは、歯の一本覚悟しなくちゃいけないんだろっな…、とそう感じたときだった。

バシィッ

目を閉じる暇もなかったのに、いつの間にかロストが目の前に移動して、その重そうな拳を片手で軽く触れるようにしていただけなのに受け止めていた。

…え？

「あんなー、ボクのトモダチになしてくれとるん？」

「は…いや…」

「ボクな、しつこい人、嫌いやねん」

あくまで朗らかな調子で。笑顔を崩さずに。それなのに目の前の冒険者は青ざめて、酷く怯えた表情になっていた。…ロスト、お前何者なんだよ。

「それにキミ、違う人のクエストを自分がやったもんとして報告してるらしいな？」

「な、なんでそれを…！」

「ズルの上でのランクなんてなんもかつこよくないわ。キミみた

いなクズはボクにはいらん」

「……んな！」

「逆切れする気？ キミ程度の實力でボクに勝てると思っとなるん？」

「……っ」

台詞をがんばるぶちこんで、相手を追い詰めていく。なんだかロスと恐こえー…とまるで人事のように思っていた。

…そんな奴が俺のパーティに入るとか、なんかすごくない？

「…まあ、こちら辺で勘弁しといてやるわ、エンディくん、もうボクを勧誘せんでな？」

「うぐ……」

どうやらあの冒険者はエンディって名前らしい。…また突っかかるかもしれないから覚えておこう。

ロストはご機嫌な様子で受付へと歩く。途中で俺達に向かって手招きをしていた、から着いていく。

「…まさか本気で入るの？」

「本気やで？ だってその方が楽しそうやもん。メンドかったんよなー、知らん人に勧誘されて勧誘されて…嫌になるっちゅーもんや。」

…もしかしてボク入らん方がよかつたん？」

「いやそういうわけじゃねーよ。でも俺達そうそう強いクエストやるわけじゃねーぞ？」

「…？ キミらボクに任せてくれてもええんやで？ それくらいの働きは…」

「まじでか！ ならこんどイベリア草とイベリアキノコ採集するときにブラックドック来たら追い払ってもらおうか！」

「恨まれてるもんね、俺ら」

「…っ！ ……ぷ、くくくく…！」

「ん？」

「どうしたんですか？」

「いいや、ボクな、Aランクやん？ 自慢やないけど、それなりに強いん…、だからな、ボクを入れたパーティが、その力に合わないくらいのクエストに参加することが多いん」

「身の丈に合わない依頼を、…ってこと？」

「うん、でもキミらは変わらへんなあって」

「当たり前だ。んな恐いとこいけるか」

「そうだよねえ、そんな恐いところ行って、また面倒くさいことになったら困るもんねえ」

「…こっとうペースのがええねんボク」

ぬふふ、と変な声をあげながらロストが笑う。ロストはAランクだとしても、性格は悪くない。むしろ良い方だと思う。だからこそ、そうやっていろんなパーティに入っていたんだらう。

そう考えると、のんびりやっていこう、なんて考えている俺らは珍しいのかもな、となんとなく思った。

まあ、そんなことで、〈コンティニュー〉にAランクの冒険者、ロストが入った。

仲間が増えました(後書き)

ロストさんが<コンティニュー>に加入しました。

どつやら事件のようですが

「…へえ、で、ロストが入ったと」

「そうなんだよ」

「くははっ、あいつらしいなあ…」

俺は昨日のことを休憩用の椅子に座りながら、テーブルを挟んで、ちよつどいたアークに聞かせていた。けらけらと笑うアークを見ているとほつとする。やっぱりいい奴も多いんだよなあ…、と考える。ちなみに今日は忌月もロストもここにはいない。忌月はゴートさんから頼まれた買い物、ロストは気晴らしにモンスターを討伐に行くらしい。気晴らしにっつておい。簡単に言うもんだなあ…。

「ちなみにアークのランクは？」

「Bだよ」

「うっわ…お前も高いんだな…」

「まあそれで勧誘もわりとあるけどさ？俺そういつのかわすの得意だからさ。なんなら君のところに入ってあげよっか？」

「勘弁。ロストの件で一部の奴らから睨まれてるのにどうしてまた敵作らなねえといけないんだ。俺はのんびりやりたいの」

「なーんだ。それはそれで傷つくなー。っつか君も変わってるね？普通そう言われたら断らないと思うんだけどなあ」

「俺らは好き勝手自由にやってたいんだよ。なんか有名になるとかそんなの考えてなーんだよ」

「なるほどー、ロストの言った通り面白いね」

「まあでも今日は一人だし、適当なお手伝いでも探そうかなって思ってるよ。いいのねーかな」

先ほど依頼の紙が張られている場所で散々悩んだのだが、どうにも一人で行うには心もとないものが多かった。なにぶんまだこちらは初心者な位置なのだ。

「エンドっちの特技ってなんなの？」

「特技？ ……料理」

「…それ以外で」

「んー、あと器用ってとこかなー」

「器用？ どんな風に？」

「んー例えば…」

俺はテーブルの上に乗っていたメモ帳を千切る。それからそれを簡単に折っていく。アークはきよとんとした顔をしていた。それをちらりと見ながら、手の中のものを形にしていく。

出来上がってくにつれて、アークの顔がどんどん輝いていくのがわかる。それを気にせずメモ帳を折り進め、出来上がったものをテーブルの上に乗せた。

「ほい、ゴブリン」

「すげええええええっ！！！！」

アーク、なぜ叫ぶ。

子供のよつに顔をきらつきらとさせて俺が作ったゴブリン（オリジナル）を手に取り眺める。

そこまですごいもんかなあ…と俺は呆れながら、もう一枚メモ帳を千切った。

「なあなあ！ これどうやって作った？」

「覚えてない。即興だから」

「まじで！？ いいなーこれ、貰っていい！？」
「そんなものでよかったら。それとほら、」

きらきらとした目で俺の折ったゴブリンを見てるアークにもう一度声をかけながら、テールに紙で作った犬を乗せる。その頭の辺りを人差し指でちょん、と触る。そこから微量の魔力を注いだ。

「まあ、こんな感じで器用」

「おお！」

くるくると動き回る折り紙の犬。ぴょんっと跳ねながらそれはアークの腕に乗る。

「すごい！ 君すごいな！」

「…俺からしたらお前の方がよっぽどすごいと思うんだけどな…」

Bランクなんだし。それでもアークは俺の作った折り紙の方をお気に召したようだ。うーん、いまいち考えてることよくわかんないな…。

そのとき、ギルドに駆け込む足音が聞こえた。なんなんだ、と、興味本位で騒ぎのある方を覗き込んだ。そしてらぱちりと合う蒼の目。

…ん？

「セフィル？」

「あああつ！ エンドさん！」

ぱたぱたとこちらに駆け寄り、抱きついてくるセフィル。いきなり

のことにのはあっ!? と変な声が漏れた。
なにそれ羨ましい! なんてアークから聞こえた気がしたが無視して、「どうしたんだ?」とセフィルに問いかけた。

「た、助けて欲しいんです! い、妹が!」

「は? え、妹いたんだ」

「はい! ……ってそうじゃなくて、そうじゃないんです!」

「わ、わかった! 聞くから落ち着け! な?」

ぼんぼん、とセフィルの頭を撫でる。この荒れた様子はおかしい。何か大変なことが起こったんだろうか。

「は、はい…、実は、妹が…、妹が、盗賊に、」

「…盗賊、に?」

「盗賊に、攫われて…!」

…あーはいはい、このパターンはわかるよ。助けて欲しいってこと
だろ?

ったく、なんで俺みたいな初心者に頼むのかねえ。ってかセフィル
だって冒険者だろ一応。

…まったく、本当に、なんで俺に頼むんだか。

…行くしか、なくなるじゃねえか。

「……た?」

「…へ?」

「…どこで、攫われた?」

「北の森です！」

「…わかった」

「…わかったって…エンドっち？ 行くの」

「そりゃ行くだろ」

「一人で？」

「まあそうだな」

よっこらせ、と俺は立ち上がる。北の森は知っているから道の方は大丈夫だ。つたく、強制イベントかよ、しかもこれ命の危険性大だよなあ…。

まあ、断るっていう選択肢を選ぶ気なんてゼロだけども。

「…君は本当に不思議な人だな」

「ん？」

「面倒ごとに突っ込みたくないのかな、と思ったら、進んで行ったり、予測がつかない」

「…言っただろ？」

俺はにかり、と笑って見せた。

「『好き勝手自由にやってたいんだよ』ってさ」

そうだ。セフィルのことだって強制されているわけでもない。断れるものだ。

けれど、俺はやりたいたいからやるのであって。ほっとけないから行くのであって。それこそ面倒ごとではあるけれど、けれどやらなかったら後悔するものなんだ。

「んじゃあ行ってくる」

「…俺も行くよ」

「は？」

「まあ俺がいた方がいいと思うよー？ 俺強いしー」

「いや、まあそしたらありがたいんだけど……」

「じゃあ行こうか！」

「あ、おい！」

アークが俺より前に出る。俺は慌ててその後を追いかけた。セフィ
ルも同じように着いてくる。

「あ、あの！ すい…ません」

「なんで謝るの？」

「あ、あの、迷惑かけた…ので、」

「どこが迷惑なんだよ？ 妹、…家族を大切に思う気持ちは、なん
の迷惑にもならないさ」

俺はセフィルに笑いかける。うつすら涙目だったのが、さらに潤み、
若干顔も赤くなっている。

「…人を引き付ける才能を持つてるんだな、君は」

「ん？」

「なんでもない、行こうか」

俺達は、北の森に向かって歩き出した。

魔力探知は便利です

「盗賊は最近頻繁に北の森で人を襲っているらしいんです。特に若い娘を狙って…、私の場合、妹が幼かったから、売れると…思ったんでしょうね」

北の森へ向かう道中で、セフィルが説明してくれた。確かに子供の方が攫いやすいし、売るのにもそういうやりやすい、みたいなものがあるのかもしれない。

この世界にはこういう人を攫って売ることもあるのか、と悲しくなる。

「盗賊ね…探すのに苦労しそうだけどね。そりゃあ奴らだって隠れるだろうし」

「……」

「ところで君なんで、エンドっちに頼んだの？」

「へ？」

さっきから思ってたんだけどさ、と繋げてアークが呟く。

「だってエンドっち特に強いわけでもないじゃん」

「…はつきり言うなあ…」

「でっ！ でもでも！」

慌ててセフィルが弁解する。

「エンドさん、前、ブラックドックの群れから助けくれたし、優

しいし、その…かつこいいし…」

「…俺、かつこいいの？」

「言われた本人がそんなこと言ったらなあ…」

恥ずかしいのか、顔を真っ赤にして俺を褒めてくれている。まあこんな可愛い子に褒められて悪い気する男はいないわな。

何故かアークが俺のことをすごい目で睨みつけてくるのは気のせいとしよう。『ぎぎぎ…』とかいう効果音も『羨ましい…』なんていう呟きも気のせいだ、うん。

「…見えてきた…」

北の森。聞いた話によると、モンスターがたくさん出てくるという…たくさん…。種類は下級モンスターから中級モンスター、上級モンスターも少なからずいるという多種多様。やばい、なんか恐くなってきた。

…でも、セフィルの妹の方が今頃怖い思いをしているんだよな…。そう考えると頑張らなくちゃ、という気持ちが湧いてくる。

「エンドっち大丈夫か？」

「多分。…なあ、これ下手すれば死ぬ？」

「まあそうだろうね」

「…気張ってくか」

軽い調子で言われました。まあそうだよな…、理解はしているんだよ。

死ぬのは怖い。一度死んだ身にとっても。

でも、やめるっていうことはハナから考えてないんだよなあ。

俺達は森の中に足を踏み入れた。耳障りな鳥の声がたまに響き、不安な気持ちさをさらに駆り立てる。

雰囲気がいやばい。今にも茂みからモンスターとかが飛び出してきそうだ。

木々が鬱々と生い茂り、暗い雰囲気を醸し出している。さらに日の光が気によって遮られて、雰囲気どおり暗い。

なんか空気が淀んでいる気がしてきた……。くそ！ 同じ森なのになんでウェイブのことここまで違うんだよ！

「なんでこんなとこまで来たの？」

「ここでもしか取れない薬草を探しに来たんです。普通に買うと高くて……。でも……。買えばよかつたんですよね。そのせいで、妹は……」

「おいセフィル、こんな暗い森でさらに暗くなんなよ。盗賊とお前のことは無関係。気に病みすぎなんだよ」

「でも！」

「妹は必ず助ける。……信じられねーか？」

「……いえ、信じてます」

「……ぶっ潰したい……」

……あれ？　なんか不穏な咳きか聞こえたような気がするんですが？　ぱつとアークの方に振り向けば、いやにきらきらとした笑顔を不自然に振りまいていた。……なんなんだろう、あの咳き、『リア充爆破しろ』みたいな響きが含まれていたような……。

「あつ、あそこです！　あそこで盗賊に襲われたんです！」

急にセフィルが声を上げた。指を指しながらその場所を示す。

そこは他と似たような場所だったが、木の根もとの方に見慣れない

草が生えていた。多分、あれが薬草なんだろう。それに争った形跡があり、土が少し抉れていたり、草が歪んでいた。りしていた。

「問題はここからどうやって…、」

「ねえセフィルちゃん、盗賊か妹ちゃん魔法使ったりした？」

「へ？ ……確か、盗賊が風の魔法を使って、目晦ましを…」

「…まだ残ってるかな？」

なにが、と聞く前にアークがその場所に立つ。それから強く目を瞑り、ぶつぶつと何かを唱えだした。

ぶわり、と魔力の波長が広がり、足元に幾何学的な模様が浮かび上がる。

魔法…？

アークの髪がふわり、と靡く。……そういえばこいつよくよく見れば綺麗な顔立ちをしている。ちくしょうこのイケメンが。……ってそんなこと考えてる場合じゃなかった。

フォン、と薄緑色の膜が波紋のように森に響き渡る。

「【魔力探知】…」

セフィルがぼそり、と呟いた。魔力探知？ なんだそりゃ。

「…北西670m、そこで途切れてる。ここで使った魔力量から察するに…そこであつてると思う」

「…？ おい、お前なにしたんだ？」

「なにつて、魔力を探知したんだけど？」

「はあ？」

「あ、あのですね！ 魔法を使った際に魔力跡というものがつくんですね？ それはしばらくの間、まあ魔力を使った分だけですが…、

水から上がった後に、地面につく水滴のように、使ってすぐは結構残るものなんです」

「つまりそれを探知するってわけ」

「でも、それ使える人少ないんですよ！　すごいです！」

「よしもつと褒めてくれ！」

なるほど、人は見かけによらないってことか。軽そうな外見とは裏腹に実力はあるってことだろう。

「予測はついたから行ってみようか」

「ん、わかった」

俺たちはアークが示す方へ着いていく。歩いてるうちに、どんどんと木々の率が増えていき、進みにくい。

なんだかよりいっそう雰囲気が悪々しくなってきた。

…本当に大丈夫だろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559z/>

End Rollとコンティニュー

2011年12月29日16時53分発行